特集「明日の山口大学ビジョン」

明日の山口大学ビジョン

～創立200周年を超え2020年にキラリと光る大学へ～

山口大学は、2015年に、本学の前身である山口講堂の設立（1815年［文化12年］）から200周年という節目を迎えます。この間、地域の人材育成に貢献するとともに世界で活躍する人材も送り出し、多くの研究成果をあげてきました。

そしていま、地域の基幹総合大学として、さらなる教育・研究の発展・充実を目指しつつ、地域に根ざした社会連携を進め、明治維新発祥の地に根付く「挑戦と変革の精神」を受け継ぎ、アジア・太平洋圏において独自の特徴をもつ大学へと進化していきます。

本学は、国立大学法人化を契機に「山口大学憲章」の起草に着手し、2007年２月にこれを制定しました。「山口大学憲章」は、本学の20世紀の活動を踏まえ、21世紀における責務を掲げたものです。

現在、国立大学は法人化に伴い自主性・自律性を備えた運営体制のもと、オンリーワンの大学として発展しようとしています。また、同時に国立大学法人運営費交付金を受ける大学として、教育・研究の質の向上と社会への説明責任を果たすことが求められています。そのため、６年毎に中期目標・中期計画を策定し、その達成状況について、第三者機関による評価を受け、結果を公表することが定められています。

本学は「山口大学憲章」の基本理念に基づき、第Ⅰ期中期目標期間の３分の２を過ぎたいま、学内外の関係者の意見を踏まえつつ、第Ⅱ期及び第Ⅲ期の中期目標期間を見据えながら、「明日の山口大学ビジョン」を策定することとしました。

ここに“創立200周年を超え2020年にキラリと光る大学”としての本学の目指すべき方向について、『教育』、『研究』及び『社会連携』のそれぞれの視点から中長期的な展望に立って大学の将来像を提示します。

2008年２月

教育 Education

山口大学は、学生と教職員が一体となり、“共育”する大学をつくっていきます。「課題探求力」や「チャレンジ精神」などの「人間力」を備え、「国際理解力」と「高い専門能力」を持つ人材育成を行い、社会の高い評価を受けるとともに、在学生や卒業生及び留学生の「誇り」と「信頼」を受ける大学になります。

そのため、学生教育を重視する大学として「育成する人材像」を明確にし、「教育プログラム」を不断に改善・充実して、学士課程教育や大学院教育を充実し、さらに、横断的な学問分野や新たな分野の学部の設置構想をも視野に入れた改革を進めます。

大学教育の根幹をなす学士課程教育の充実

○地域社会や国際社会で活躍する人材の育成

・社会人や留学生を含む多様な学生と研究力に富む教員とが切磋琢磨する“共育”を推進します。これにより、創造性豊かで幅広い視野と柔軟な発想を養い、専門性を備え、リーダーシップを発揮でき、かつ人間力に富み地域社会と国際社会で活躍できる人材を育成します。
・体系化されたカリキュラムと体験型学習の導入などにより、「学習成果」を担保し、課題探求力と豊かな英語力に加えアジアの言語によるコミュニケーション能力や国際理解力を備えた人材を育成します。
・世代や国籍を超えた多様な学生の交流による学習体験などのキャンパスライフを通して、公正・平等・友愛の精神に富む人材を育成します。

○人間力と問題解決力を培う学士課程教育の充実

・リベラルアーツを充実し、人間力溢れる人材育成教育を行うシステムを整備します。
・人間主義に根ざした協調と融和、そして自主独立の精神を涵養する教育を行います。
・問題発見と解決に資する能力を涵養するため、基礎に裏打ちされた実学を重視する「創成教育プログラム」を不断に推進するとともに、国際的に活躍できる人材育成のための創造性育成教育を行います。

○時代の変化に柔軟に対応できる教育環境及び教育方法の改善

・先進的かつユビキタスなIT環境を整備し、本学独自の取り組みと他大学や民間との共同の取り組みにより、新たな教育プログラムや教育方法を開発し、多様な教育を提供します。
・多様な学生に対応できる教員への支援体制と教育支援者の能力養成のため・教職員の能力開発のための体制を構築します。
・９月入学の拡大と国際交流協定校との連携の強化、学生の海外派遣の拡大、外国語による授業と体系的な短期研修プログラムの開発など、教育過程の見直しを行います。
・厳格な評価に基づき、学生がスキルアップできる体制を構築し、課題探求・解決学習、実践的教育を通して、卒業生の質を保証します。
・柔軟な思考力を備えた学生を育成するため、学部間の連携による教育の実施体制の効率化により、教育内容を充実します。

特色ある大学院教育の充実

○専門性と社会性を育む大学院教育の充実

・教員の高度な研究力・教育力のもと、大学院研究科が授与する学位にふさわしい専門性を有する国際的な教育水準の保証・認証を受ける大学院教育を行います。
・インターンシップや海外研修など多様な機会を提供し、学生の自発性を喚起して能力開発を保証するカリキュラムを構築します。
・産業界・地域等の社会に開かれ、年齢、性差、人種等にとらわれない多様な学生と教員による「共育・研究」を推進できる大学院の教育体制を構築します。
・文理複合型等のカリキュラムの導入を実現します。

○国際性豊かな大学院教育の推進

・学位授与の基準・方針を明確に提示するとともに、英語による講義を推進して国際的に通用する教育を行います。
・アジア・環太平洋圏の高等教育機関との連携を進めてサテライトを構築するなど、教育のハブ（結節点）となる拠点として、教員及び教育支援者や大学院生の国際交流を促進し、世界で活躍する高度な人材を育成します。
・留学生受入れの拡大と外国人教員の充実を行い、外国語による大学院教育を一層充実するとともに、留学生のための日本研究などの教育にも重点を置きます。

○地域の基幹総合大学としての特徴を生かした特色ある大学院の再構築

・地域社会や国際社会の要請に応え、文化の発展に寄与する人材育成のため、大学院教育に関連した予算を充実し、優れた教員を確保して、教育体制やカリキュラムの不断の再構築を行います。
・地域のリーダーとして活躍できる高度専門職業人と研究者の育成のため、高度な研究に支えられた研究力を基盤とする大学院教育のカリキュラムを構築します。
・大学間連携を促進して、先端的研究を広範囲にカバーした教育体系を充実します。

教育のための教員組織の改革

○全学的な人材活用と教員組織の見直し及び教員の重点的配置

・教育環境の変化や学問の進展に応じて、柔軟な組織再編を可能とするため、教育組織や教員組織のあり方を見直します。
・教員の教育能力の開発を進めるとともに。教育の質の保証を可能とする組織や環境を形成します。

社会と共存して発展するための学部及び大学院組織の改編

○新しい大学院の形態

・専門性と独創性に優れた幅広い人間力の獲得が可能なカリキュラムを有する大学院を構築します。
・研究科間または国内外の連携する大学院との間で、ダブルディグリープログラムを実現します。

○社会の変化やニーズに対応できる学部・大学院の構成

・社会の変化やニーズに対応できる学部及び大学院の構成を随時検討し、教育組織の改廃・新設を行います。

研究 Research

山口大学は、専門分野での学問深化と、分野間の協力で行う総合的な研究によって、人間、社会、自然などの総合的な理解を進める研究、課題を解決する研究、新たな価値創造を目指す研究を推進します。

そのために自己変革を繰り返しながら戦略的な取り組みを展開し、特徴ある教育研究拠点形成やイノベーション創出機能の強化などを実現するとともに、研究基盤を継続的に強化して多様な研究を促進し、「知の重層的なストック（蓄積）」を形成し、社会と大学との「バリュー・チェーン（価値連鎖）」の形成を目指します。

さらに、研究推進の取り組みと研究評価にもとづく改善を積み重ねることにより、研究において「複数の強みが連続的に生まれる大学」を築きます。

戦略的取り組みと研究拠点の形成

○戦略的な取り組みによる世界をリードする研究中核体の形成

・個々の研究者がもつ意欲や能力を発揮して実現する研究の多様化促進の他に、国際水準の待遇と研究環境を用意して極めて優秀な外部人材を核とし、複数の研究部門から構成される「先進科学・イノベーション研究センター（仮称）」を設置し、中核研究拠点にします。

・このため、特別人事制度の創設、特例的投資指針の策定、外部資金を軸にした研究推進体制の構築等を進めるとともに、研究センターのパフォーマンス評価を定期的に行うシステムを作動させます。

○戦略的な取り組みによる重点研究核の形成

・既設の研究センターや研究推進体などの中から重点育成研究コア候補を選定し、年齢、性差、人種等にとらわれず、優秀な人材を登用することを軸とする「人材戦略」、外部研究資金の倍増を軸とする「研究資金戦略」、国際的な共同研究と研究者交流を軸とする「国際連携戦略」のもとに、重点研究核を形成します。

研究基盤強化、協働、共創を通じた知の重層的なストックの形成

○研究基盤の継続的な強化による研究の多様性の促進

・個々の研究者のもつ意欲や能力の発揮のために、施設・スペース・設備機器などを「施設・設備のマスタープラン」に沿って計画的かつ継続的に強化します。

・全ての分野における多様な研究を支える学術図書や情報ネットワークなど、学術情報基盤の整備を計画的に推進します。

・飢餓と貧困の克服、平和な国際社会の構築、地球環境の維持・保全、心の豊かさの実現、心と体の健康、文化・歴史の継承、持続的発展可能な社会の構築など、世界の人々の期待に応える研究に取り組み、知の重層的なストックを形成します。

○若手、外国人、女性研究者、学生の活躍

・研究力を継続的に向上させるため、優れた若手研究者や女性研究者の計画的登用、外国人研究者の積極受入れを実現します。

・将来の学問を担う若手研究者の育成を重視し、研究支援はもとより、国際的な人事交流・派遣制度の充実を計画的に進めます。また、未知の課題に立ち向かう研究に参画する大学院生や学部生に対し、国際交流や留学機会の増大、就学に必要な経済支援の拡充などを進め、高度な専門能力、チャレンジ精神、広い視野などを総合的に育成して、社会が期待する人材を輩出する大学になります。

○知の重層的なストックを形成するための研究資金

・研究に必要な予算の確保・増強のために外部研究資金獲得の戦略的取り組みを展開し、2020年には外部資金の大幅増を実現します。

・外部資金に付加される間接経費は、基盤的な研究の推進のためにも投資します。

○協働と共創によるプロジェクト研究の推進

・学内の研究資源を学外に開放しつつ、学外の研究資源も有効に活用してプロジェクト研究を推進し、国内外の大学間、産学間、官学間、民学間の連携構築を促し、国際的に通用するブレークスルーとなる成果を生み出します。

研究を通じた社会とのバリュー・チェーンの形成

○地域発展につながる研究の推進とバリュー・チェーン形成

・人文・社会科学、自然科学、両者の複合分野での多様な研究の成果を生かし、文化、歴史、社会、教育、健康、環境、医療、産業などの分野で地域交流及び国際交流を深め、研究が生み出す多様な価値をもとにバリュー・チェーンを形成します。

・地域の誇りや心の豊かさにつながる研究、新産業の創出、中小企業の活性化、農林水産業の再生等の地域課題に対応する研究などを推進し、西中国・北九州地域を豊かで競争力のある地域にするために力を尽くします。

○イノベーション創出と知的創造サイクルの形成

・イノベーションの「種」となる基礎研究から生まれる「発見」を生かして、知的財産を創出し、国内外の産業界との間で知的創造サイクルを構築します。

研究において複数の強みが連続的に生まれる大学へ

○“2020年にキラリと光る山口大学”にふさわしい研究力と研究体制

・明治維新を成し遂げた先人のスピリットと知恵を受け継ぎ、継承と発展、挑戦と創造、協働・共創の精神で、必要に応じて、育成と蓄積、選択を集中を図り、決断をもって教育研究組織の改編を行います。

○研究活動の評価と改善によって複数の強みが連続的に生まれる大学

・大学の研究活動が社会から理解され支援されるようにするため、研究評価の結果を組織別に公開します。

・研究者個人の自主的な研究活動の評価では、研究者を励まし、研究力向上につながる評価に重点をおきます。一方、組織化されたプロジェクト研究の評価では目標管理やマネジメントの適否に重点をおきます。

・大学自身が実施する研究支援施策に対する評価結果も公開し、研究評価結果に基づいて施策の改善を図り、複数の強みが連続的に生まれる大学を築きます。

社会連携 University Social Responsibility

山口大学は、資質の高い教員や優れた医療人材など、様々な社会で活躍できる人材の養成・育成に加え、研究における国際連携の強化、先進医療の地域への提供、生涯学習及び産学連携など、教育、研究、医療、文化及び経済の各方面から、地域社会や国際社会との連携を軸に据えた活動を発展させていきます。

本学は、地域の基幹総合大学として、また、アジア・太平洋圏において独自の特徴をもつ大学に進化することにより、教育・研究の成果を広く社会に提供するとともに、地域社会や国際社会との連携をかたちにし、社会の発展に寄与します。

地域社会の期待に応える活動

○地域の教育・文化の発展への寄与

・本学の地域課題に関する教育研究機能を生かし、教育・文化医療・福祉、生活・環境、防災・安全、及び各種の地域政策や産業などの分野で、様々な取り組みを行う地域の諸団体と連携して、地域の期待に応える連携事業を進める大学としてさらに力を尽くします。

・公開講座及び開放授業等の実施・拡大、地域の諸団体と共催するフォーラムの開催などを通じて、地域住民が抱く大学との距離感をさらに縮め地域の中で存在感がある大学としてその連携活動を強化します。

・すでに実施している県や市町村などの地方自治体との包括的な連携協定、公設試験研究機関との組織的な連携協定を一層発展させ、ゆるやかな連携の枠を越えた人材交流機会の増大、互いの管理する施設・設備の相互運用の拡大などを実現し、高い水準の連携事業を展開します。

・大学の教育研究機能を生かして行う地域研究に関する連携事業、大学教員のもつ高度な専門知識の提供、地域の初等・中等教育を巡る諸課題への対応、地域社会に参画するための学生の自主活動への積極支援などを通じ、大学の教職員・学生と地域との“共育”を進めていきます。

○研究連携と地域イノベーションの推進

・人文・社会科学分野における地域の歴史研究、文化研究、経済研究などの成果、理工学分野における地域の自然研究、防災インフラ整備と保守、環境の保全・復元、医学・保健学分野における地域中核医療の提供、住民の健康増進、農・獣医学分野における農林水産業の再生、食の安全、高度獣医医療の提供など、様々な研究連携をさらに推し進めていきます。

・地域イノベーションの推進のため、大学におけるプラットフォーム機能を強化し、研究成果を地域産業界で活用することにより、産学連携を強化していきます。

○地域医療の充実

・卒前・卒後・生涯教育を通じ、質の高い医療従事者の育成や地域医療を支える人材を育成します。

・中国地方の中核医療拠点として難治性疾患の治療やQOL（Quality of Life）向上のための先進医療を提供します。

・高度救命救急医療、がん治療、生活習慣病の予防・治療などの拠点として、地域医療に貢献します。

○高度獣医療の提供

・動物医療センターを中心に、西日本における拠点二次診療施設として、脳神経疾患や腫瘍性疾患などの分野における高度獣医医療を提供します。

国際的な社会連携活動

○大学間ネットワークによる国際連携及び国際協力・交流の推進

・海外大学とのネットワークを構築し、交流協定校や海外の研究機関との交流・連携活動を活発化するとともに、交換留学及び国際的なインターンシップの派遣・受入の制度や事業を充実します。

・アジア・太平洋圏における海外現地拠点を確立するために、複数の海外オフィスを連携機関と協力して設置し、留学生の受入れ、研究者の交流、国際協力、国際産学連携などの加速的推進を支えます。

○高度先進医療による国際社会への貢献

・附属病院診療科においては、国際競争力を持ち、専門医を揃えて、外国人の受診・治療をさらに拡大するとともに、アジア・太平洋圏の高度医療と医学研究の発展に力を尽くします。

社会連携及び国際化のための体制構築

○社会連携及び国際化のための組織・体制の充実

・地方公共団体との連携により、地域再生に貢献するとともに、社会のニーズと大学のシーズの適合を目指し、地域貢献・社会連携及び国際化のための拠点形成と、組織・体制の充実を図ります。

・政府系国際機関等との包括的な連携・協力のもと、人材育成、環境問題及び各種調査協力などの事業を行い、アジアを中心とした国際社会の発展に貢献します。

・民間企業や公益法人等との連携を推し進め、「国際協力の里」ネットワークを実質化して、開発途上国に対して先端技術や伝統技術等を提供する場を構築するとともに、国際協力事業を積極的に行います。

・「大学コンソーシアムやまぐち」の中心的役割を担う機関として、コンソーシアムが取り組む活動を積極的に支援します。

・国際交流を専門的にコーディネートできる支援人材の確保と養成を進めるために、外部人材の登用及び教職員の海外派遣や研修を計画的に進めていきます。

○戦略的な広報活動の充実

・インターネット時代に則した広報システムを強化し、連携構築に繋がる大学情報を積極的に開示・広報します。学術情報提供の面では、特色ある研究の成果等の公表、論文等に掲載された学術成果データベースYUNOCA（山口大学学術機関リポジトリ）を充実し、地域社会と国際社会に対する情報提供活動を強化していきます。

・産業界への情報提供機能を一層強めるとともに、ベンチャー企業の育成も促進するなど、地域活性化と地域イノベーションに尽力します。

ビジョン実現のための運営方針

山口大学は、大学をめぐる情勢の変化に即応したスピード感のある意志決定と効率的かつ迅速な業務の実施、中長期的な行動計画と財務計画に基づく持続的な経営、社会のニーズに即応した柔軟な学部・研究科等の再編などを念頭に置き大学改革を進めます。

透明性を確保した健全で効率的な大学運営

・学長及び部局長等のリーダーシップのもと、透明性を確保した迅速な意思決定を行い、責任と権限を明確にした実施体制により、大学をめぐる情勢の変化に適切に対応します。
・学長を中心に、各副学長や部局長等が連携し、中長期的ビジョンに基づく戦略的な中期目標・中期計画を策定し、これを着実に実施し、大学改革を行います。また、策定にあたって、広く学内外の意見を聴くとともに、PDCAサイクルを確立し、業務改善を行います。
・業務の効率化・合理化及び事務組織の見直しを不断に進め、限りある人的資源を有効に活用するとともに、IT技術・基盤を駆使して、学生や社会に対して質が高く迅速なサービスを提供します。
・教員が、教育と研究に専念できる環境を創出するために、委員会体制を機能的に改善し、教職員間の協働体制を構築します。

構成員の活力がいかせる人事制度の構築

・教職員が健康で安心して働ける労働環境を保証するとともに、教職員の能力向上と業務改善に資するため、人事評価システムを充実し、適正かつ正当な評価を行います。
・定年年齢の見直しを検討するとともに再雇用制度を確立し、個人の能力や主体性が発揮できる多様な勤務体系や柔軟な給与制度の導入等、本学独自の人事制度を構築していきます。
・大学の人材養成方針に沿って、計画的に人材養成を行うとともに、人事の透明性を確保し、大学に貢献できる優秀な人材を、学内外を問わず登用します。

健全な財政の確保

・大学の持続的な発展と教職員の健全な生活を保証するため、中長期的な人件費の動向を踏まえた財務計画を策定し、人的資源及び財的資源を有効に活用します。
・競争的資金や民間資金等の外部資金の獲得及び自己収入を確保して、教育・研究環境の整備を進めるとともに、入学料及び授業料を抑制し、国立大学法人の使命として、広く教育機会の提供を行います。
・「山口大学教育研究後援財団」との連携・協力のもと、教育・研究の基金を充実し、基金の運用益を適切に活用して、教職員と学生が安心して活動できる教育研究環境を構築します。
・経費の抑制や削減を進めるため、業務委託組織を活用したアウトソーシング等による業務の合理化を行います。

本学の前身「山口講堂」の扁額
（山口大学商品資料館保存）

・不正を許さない揺るぎない姿勢と取り組みを示すとともに、経営状況の健全性を毎年度公表し、社会からの信頼を得ることで、国や地方自治体からの公的資金の獲得を行います。

学生と教職員が「共に育み、切磋琢磨する」環境の整備

・先進的なIT基盤を有する大学としての特徴を活かした教育・研究環境を提供します。
・３キャンパスにおける教育・研究の基盤を整備し、各キャンパスでの４年（又は６年）一貫教育体制を構築できる環境にします。
・寄附金、PFI事業及び民間からの融資を活用して、施設・設備の高度化を図るとともに、学生、留学生及び若手研究者に対する支援を行い、キャンパスを学生及び教職員の夢をはぐくむ学舎とし、また、広く地域市民に開放します。
・西日本地区の大学等と連携し、施設・設備等の共同利用システムを構築することで、本学が拠点となる環境整備を図ります。
・同窓会の連合組織と連携し、在校生、卒業生、在校生の家族及び教職員とのネットワークを国内外に網羅し、大学の最新情報を提供するとともに、定期的に交流会を開催し、卒業後のキャリアアップ事業等を実施します。

「国際化」に重点を置いた大学運営

・国際化に関する明確な理念・目標の設定を行い、国際戦略を計画的に進めます。その際に、諸外国の動向を踏まえ、大学シーズとのマッチング・解析、リスクマネジメント、費用対効果の検証を行うとともに、第三者機関による国際化に関する評価を実施します。
・大学が行う国際化に係る取り組みの対象を地域の産学官民に拡大し、国際社会への貢献に寄与します。
・外国人留学生が安心して学ぶことのできる環境を提供するため、学生宿舎の充実、奨学金の支給など生活面における支援を行います。

「長州五傑」記念碑
（2006年4月26日建立　於：大学構内）

▶お問い合わせ先
総合企画部　企画・評価チーム
Tel：083-933-5076　Fax：083-933-5959
E-mail：sh041@yamaguchi-u.ac.jp

特別企画　座談会

「明日の山口大学ビジョン」策定にあたって

「明日の山口大学ビジョン」が平成20年２月に策定されました。策定の作業はほぼ１年間かかりました。策定のための組織は、村田副学長を座長とし、学内の教員、職員から９人の計10人からなるワーキンググループがビジョンの骨子を作成しました。さらに小委員会として、ワーキンググループのメンバーに学内委員として学部長等４人と外部委員として大学以外の委員２人を追加した組織で、検討を加えました。適宜、学長に報告し、委員会以外からの意見の聴取に努めながら作成されました。

この「ビジョン」策定にあたり、丸本学長と村田副学長のお二人に真摯で熱い思いを語っていただきました。

○司会　それでは、「明日の山口大学ビジョン」の策定についての座談会を始めたいと思います。よろしくお願いします。

まず、この「明日の山口大学ビジョン」――ビジョンと略しますが、ビジョンの策定の目的、動機やきっかけについて、学長からお願いいたします。

○丸本学長　ビジョンの策定のきっかけからお話します。国立大学は法人化して４年目になりますが、この４年間を振り返ると、すべての国立大学はどのように今後の大学の方針を決めるかということに戸惑いながらその方向を考えてきました。

法人化前までは、すべての国立大学が同じような目標に向かって邁進してきたものですから、法人化に当たっては特徴を出して、各大学の特色をどのように生かしていくか、また、差別化をしていくかが分からないままに法人化したと私は思っています。

そういう状況で、山口大学としては特徴をどこに求めるかということを考える必要があると思いました。旧帝大系と同じようには戦えない状況で、山口大学としてどういう特徴を持つかということを、しっかり見ていかなければいけないと思います。

平成18年度に山口大学憲章を策定して、50年から100年単位の方針は決めたけれども、それだけでは本当の行動がとれないんですね。

○司会　そういう状況でビジョンの策定に取り掛かろうと考えられたのですね。

○丸本学長　そうです。そういう意味で、村田副学長とも相談して、やはり山口大学の中期目標をビジョンという形で表す必要があると考えました。それを一つの目標にして大学のあり方を進めていかなければ、その場その場の対応ではとても大学の将来はないと考えました。

そして中期目標的なビジョンを出すとすれば、10年か15年ぐらいの間隔での山口大学のあり方を考えて、それをもとにまた、次の10年か15年後に、修正が必要ならばその時また考えればいいということでビジョンを策定しようと決心したわけです。

ちょうど山口大学が創立200周年を迎える2015年を一つの目処にして、15年から20年のビジョンを立ち上げようと考え策定したのがこのビジョンだったんですね。

○司会　策定に当たっては何を重視されたのでしょうか。

○丸本学長　そのときに一番問題だったのはグローバル化ということでした。大学の一つの目的は教育、研究それから社会連携の３本の柱ですから、それを踏まえて15年から20年近いビジョンを立てようとしたときに、現在の一つの社会の流れの中ではグローバル化という問題が非常に大きくクローズアップされてきました。そうするとすべての教育、研究、社会連携の中にいかにグローバル化を組み込むかということが、山口大学としては重要な課題だと思ったのです。

○司会　教育、研究、社会連携の３本柱とグローバル化はどのような関係になるのでしょうか。

○丸本学長　山口大学としては、現段階では、世界中とグローバル化を進めるような力はないので、どこか一つ、何か的を絞る必要があります。しかし、グローバル化を一つの項目として取り出して策定するのは難しいと考えたので、教育、研究、社会連携の中にグローバル化を組込めばよいと考えました。３つの柱の中に世界との連携が入るので、それをうまく組み込みながらビジョンをつくりたいというのが私の気持ちでした。

○司会　ビジョン策定の取り組みについてはいかがでしょうか。

○丸本学長　策定については、全学的に行い、皆さんの御意見も踏まえながら検討するということで、ほぼ１年近くはかかりました。副学長の村田先生が座長としてうまく意見を集約していただいたと私は思っています。

検討の途中で、随時、村田副学長から報告を受けましたが、学長の意向をぜひ、できるだけ踏まえたいということを聞き、大変ありがたく思いました。私も最終的には学長のリーダーシップのもとに出したいという思いがありましたので、できるだけ私の学長としての思いも盛り込んでいただいたと思っています。ただ、それを勝手に私が組み込んだのではなくて、その意向を踏まえて、全学のコメントを聞きながら集約していただきました。ですから私は、この「明日の山口大学ビジョン」は山口大学の将来を左右するビジョンだと思っています。

○司会　ビジョンの反響についてはいかがですか。

○丸本学長　実は今日（３月14日）も退職者の永年勤続表彰の式典がありましたが、そこでもビジョンを作成したことが話題になりました。

「このビジョンをいかに実現するかが今後の山口大学の将来に関わるので、ビジョンの実現に向けて全力を尽くしてほしい。それには我々退職者も陰ながらサポートをしたい。」という言葉をいただきまして、私は本当にうれしく思いました。

山口大学長　丸本　卓哉

○司会　このビジョンは将来にどのように関わるのでしょうか。

○丸本学長　このビジョンは山口大学の将来を決める重要な課題であるということを、職員の方々も捉えていただいているということが、今日、伝わってきました。本当にありがたく思いました。

このビジョンは教育、研究、社会連携からなっていますが、実は、私も今回のこれを見て非常にうれしく思ったのは、このビジョンの実現によって、山口大学の将来は安泰だということです。それは、他の大学も多かれ少なかれ、これと似たようなビジョンは考えていますが、山口大学は非常に具体的で、目的と目標と、これを実現するための大学の運営方針というのが入っています。他の大学でも、おそらくビジョンの中に社会連携を含めて３つの項目はあると思いますが、それを実現するためにどうするかという具体的な運営方針までを出しているのは、他の大学ではないと思います。

そういう意味では、実現するためには改善すべき点がたくさんあります。私が学長になって、うれしいことがあります。それは、今までは大学のいろいろな方針については教員が主体にやって、事務の組織がそれをサポートするという体制だったのですが、それが今回は違ってきているのです。

○司会　それはどのようなことでしょうか。

○丸本学長　それは教員と事務職員が一緒になって、今後の山口大学の教育、研究、社会連携の運営についても協力をして、「協働」の精神とともに行うということがこの方針の中に、非常に大きく謳われていることです。

ビジョンを実現するために、教職員の方のやる気といいますか、そういう気持ちが備わらないと、どんなに計画がよくても人間がやる気がなかったら絶対できません。そのことを私はここに組み込んでいただいているということがこのビジョンの特徴だと思うのです。

○司会　やる気を出すための方策はどのようにお考えですか。

○丸本学長　そのためには、やはり今までの文部科学省時代とは違った人事のあり方が必要だと考え

ます。これは一つには昇進や評価に関わることがあります。今もう一方で進んでいる職員の評価制度、教員の評価制度を参考にしながら、公平な人事制度を構築しようとすることがこのビジョンには謳われています。

私はここが非常に重要だと考えます。それで、教職員が全員やる気を出して立ち向かえば、いろいろなことがあっても、必ず解決できると思っています。それが今回のビジョンを実現するための最大の目的であり、それがうまく組み込まれたと思っています。

○司会　では、ビジョンを多くの教職員が実行するためにはどのようにすればよいのでしょうか。

○丸本学長　私はことあるごとにこのビジョンの周知徹底を図りたい。それが、教職員の意識改革につながると思っています。従来の年功序列的な人事制度を変えて、法人化した段階では、若手の教職員を含めて頑張る人にできるだけインセンティブを与えて、能力別の人事を行うことで、活力を活性化するというのが目標だと思います。

私は人事評価システムを充実させながら、適正な評価をしたい。そして、本当に大学のために頑張ってくれる人を評価し、そういう人材を大学の中心に据えたいということがビジョンに盛り込まれています。こういう基本方針ができたということが非常に私はよかったと思っています。

○司会　ここまでビジョンの位置づけを述べていただきましたが、マスタープランという言葉が前にあったんですけれども、マスタープランとの関係はいかがでしょうか。

○丸本学長　マスタープランとの整合性はとれています。マスタープランを策定するときも、年限までは考えてなかったんですね。例えば、大学憲章は50年、100年ぐらい変わらないようなものなんです。このビジョンはマスタープランとそんなに齟齬はないと思うんですが、やはり我々教職員にとって重要なのは、大体５年とか10年とかという期限の定まった目標を掲げ、達成することなのです。期限を定めないと、いつまでやればいいのかという不安が起こるんですね。

そういう意味では、今回200周年を迎えた後へという2020年と、はっきり決めたんですね。2020年というのは今から考えると、12年先になるんですけども、10年から15年ぐらいのスパンで、山口大学の目標を一つに定めることができたと思っています。

○司会　目標の達成についてはどのように考えておられますか。

○丸本学長　おそらくここに書いてあることは2020年ぐらいにはほぼ達成できるんじゃないかなと思っています。このビジョンは文部科学省が言っている中期目標とはちょっと違いますから、場合によっては達成できない部分が出るかもしれませんが、私はほぼ達成できるのではないかという期待を持っています。

○司会　それでは、実際に責任者となって策定された村田副学長にもお伺いしますが、全体的なご感想をお願いいたします。

○村田副学長　今年で、法人化５年目に入っているわけですけれども、憲章の策定は法人化３年目になりましたように、第１期目の中期目標策定後となってしまいました。私たちは、そろそろ第２期の中期目標を考える時期ですが、先ほど学長が発言されたように、大体、12、3年おきに、各大学はこのようなビジョンを、将来学長がどなたになられようとずっと策定公表すると思われます。そうすると、大学の教職員はもちろんのこと大学関係者も10年先がイメージできるわけです。今回のビジョンはそういうシステムを最初に導入したことになると考えています。

第２期の中期目標検討を年内に始めますけれども、その前にこのビジョンが策定されたことは意義深いことと思っています。さらに、大学憲章は、ある意味ではかなり期待されたかもしれませんが、抽象的、理念的ではないかという声も出ておりました。そういう人たちがこのビジョンを見ることによって、教育、研究、社会連携という項目のほか、ビジョン実現のための運営方針を見る

総務企画担当　副学長　村田　秀一

ことによって、理解が進み大学の将来像をイメージすることが出来ると思います。

○司会　それでは、このビジョンについての完成度はいかがでしょうか。

○村田副学長　このビジョンの自己評価ということに関しては、みなさんがこれをどのように感じられるかというのは大変気にしています。運営方針のところをきちんとと見て、そして１行１行に示されている内容のその裏を読み取る方々がおられると、その方々にとってはこの重みというのはかなりひしひしと来るもので、10カ月をかけた価値のあるものと私は自負しております。

しかしながら、表面的に見てしまいますと、これは単に項目を並べただけではないかと受け取られる可能性があります。仏つくって魂入らず、ということになりますので、魂を入れるためにはやはりビジョンの実現のための運営方針のことを意識しながら読んでいただければ、真意を理解していただけると思います。５段階評価でも５を取れると思います。内容が５という意味ではなくて、こういう制度を採り入れながら大学が第２期目の中期目標（中期計画）を迎えようとしているということが、一番よかったと考えています。

○司会　法人化になって私たちも意識改革が必要と考えていますが、こういったビジョンが示されることによって、意識の活性化が進むと思われます。先ほども伺いましたが、ビジョンの周知という点では村田副学長はいかがでしょうか。

○村田副学長　まだこれはWebページに載せたという段階ですけども、教職員の方約3000人おられますので、その方々がすべて目を通されたというわけではありません。このインタビューが掲載されるYU Informationを通して、これがさらに教職員の皆さん方の目に触れると思います。

最初、このビジョンを作成するに当たって、対象者をどこにするかということを検討しました。ある程度成熟した大学、すなわち認知を受けた大学においては、欧米諸国の先進大学を見れば、やはり社会に対してのアピールと、あるいは社会における「山口大学像」ということが第一義に来ると思います。

しかし、法人化５年目を迎えた今におきましては、大学の教職員の方々に対する大学像の提示を重要と考えました。特に教職員の方に関しまして、この広報誌YU Informationのほかにさまざまな形で、ビジョンを配布し、ある程度意識を持ってそういう方がこれを見られることを期待します。教職員であれば今から数年先にどうなるかということは考えておられるでしょうから、これをそういう目で見ていただけるのではないかと期待しております。

また、社会に対してもこのビジョンを公表することで、山口大学の将来を具体的に理解していただきたいと考えています。

○司会　村田先生のお立場で一番苦労されたというのはどういうところでしょうか。

○村田副学長　このインタビューを通じていろいろ話が出てきていますが、どこまで具体的に示せるかということに一番苦労しました。もうそれに尽きるかもしれません。

こういうビジョン、あるいはマスタープランというようなものをつくる場合には、具体性と理念とをバランスよく織りまぜて書かなくてはいけないと考えます。ですから、これをもとに、新たに第２期目の中期目標もできますし、年度計画もできるわけです。

○司会　ビジョンが公表されて１カ月ぐらいになりますが、反響はいかがでしょうか。

○村田副学長　先ほど話したように、結果的に皆さん100人いれば100人の意見があるわけですが、この作業を通じて、10年先を予測することを結構苦手にしている人もおられるということを実感しました。つまり、意識改革をどのように図るかが重要と感じました。

○司会　ビジョンについての理解という点ではいかがでしょうか。

○村田副学長　ビジョン策定に関わっていただいた

総務企画担当　副学長補佐（司会）　福田　隆眞

ワーキンググループの委員、外部委員の方々は10年くらい先の山口大学をイメージして議論を進めてきたわけですが、これを見られる教職員の方々とか社会の方々というのは、2020年を見越して書いてある文章から具体性を見つけて、何をしなければいけないかが見えてくると思います。

○丸本学長　ですから、大学の方針はこのビジョンを見てもらえばわかるので、これに沿って具体的な行動、活動案を作っていただけばよいと思います。方針がここに定まったということは、私は非常に大きいことだと思います。これに向かって、それを実現するための具体案をいかにつくるかということが今後の勝負になると思います。

○司会　このビジョンを周知して具体化することが重要ですね。

○丸本学長　そうですね、私は当面、ここ10年ぐらいは大学ビジョンに沿っているかということを一つの基準にしていただければと思います。それを学内外の方に理解していただきたいと思います。

　ですから、そして随所でビジョンに沿っていますかという問いかけをしながら進めていけばよいと私は思っています。

○村田副学長　作業を通じてずっと望んだことは、改革のことです。今までは文部科学省などの規制の中で小さな改革を続けてきたのですが、今後は大きく変えようという改革がこのビジョンにはたくさん入っています。

　願わくば、この改革が外圧でもって改革されるのではなく、自ら改革していくことができれば山口大学は発展し、今以上の地位を築いていけると信じています。

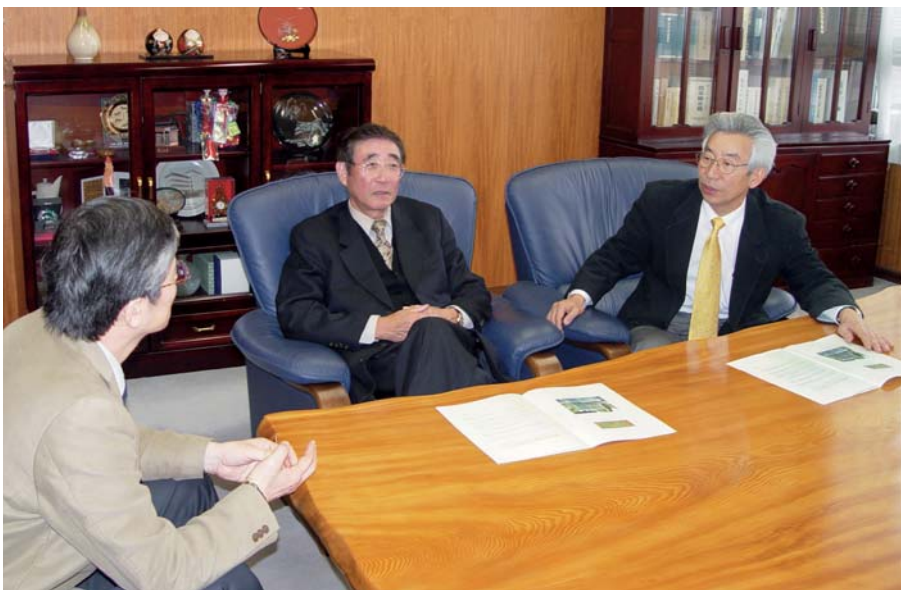
○司会　広報では、これからこのビジョンをいろいろな場面で逐次、学内でまず周知していうことを考えておりますし、それには学生さんも大いに関わっていただきたいと考えています。

○丸本学長　そうですね。特にやはり山口大学に優秀な方に来てもらいたいので、今後、社会に対して、大学はこう考えているということを広報したいと考えています。Webページでの周知も大事ですし、場所によっては高等学校にも可能な限り配布して、山口大学こんなことを考えているんですよということがわかっていただけるようにしたいと思います。

○村田副学長　今、学長が話されたようにどんどん積極的に学外にもアピールして行こうと思います。卒業生や高校生の方々には全文を読んでいただきたい。概要版を配布して理解していただきたいですね。もちろん、Webページなどで、詳しいことをみていただきたいと思います。

○司会　今日はどうもありがとうございました。このビジョンが今後、多くの方々に周知されて、よりよい山口大学になることを願います。

（平成20年３月）



「明日の山口大学ビジョン」へのコメント紹介

「明日の山口大学ビジョン」策定にあたって山口大学経営協議会委員（学外有識者）の方から、貴重なコメント・意見を頂きました。
ここで紹介します。

磯野　恭子
岩国市教育委員会教育長
経営協議会委員

ＮＨＫの「クローズアップ現代」である日、ものづくり王者といわれた日本のオーナーが21世紀に企業がトップランナーとして生き残るための人材を日本ではなく、中国や韓国、インドの大学に求めていると伝えていました。

驚きました。日本には理工系の学生が減り、高度なものづくりへの技術力が落ちています。ＩＴ産業が目指す世界レベルの競争に乗り遅れているなどがその理由だといいます。

これまで経済人や政治家や専門家は、この30年位の世界観で大学に改革を求めていて、文部科学省も地方の大学に競争原理を持ち込んだ運営費交付金の配分など厳しいハードルを設定しています。

世界がグローバル化の中で大学の競争力を高め、市場から求められる人材の輩出を望むなら、教育・研究の基盤となる運営費交付金の減額は我が国の高等教育の将来を暗くします。

競争原理とか効率が学問と教育にもたらしたことを秤にかけています。経済財政諮問会議の委員の持っている世界観や学問観を壊すには、アヘン戦争・明治維新・戦後60年までの近大社会の歴史に遡らなければならないのではないでしょうか。

山口大学はアジアに近い。アジアが熱く輝く21世紀。そこで技術的にも精神的にも大局的思考がいきる人材を育てて欲しいです。そのためには地球を時速300㎞で動く俯瞰的な情報をキャッチしながら、自分をドライブし知識を創造する近代史的な目と超高速時代のそれを併せ持つ教育システムを優秀なスタッフと健全なる財政の裏付けも欲しいです。

鎌田　　積
(財)日本開発構想研究所
理事・研究副本部長
経営協議会委員

21世紀を迎えた我が国の社会は、世界に例を見ない少子、高齢化時代に突入し、解決すべき多くの課題を抱えています。国立大学は、地域の国際的な交流拠点として、「教育」「研究」「地域貢献」という３つの機能を発揮して社会をリードしていくことが強く求められています。山口大学創立２００周年に向けた、「明日の山口大学ビジョン」の策定は、国立大学としての使命を実現する上で極めて意義あるものと思います。

本ビジョンの特色は大学の設置目的である人材養成に関し、学士課程教育において、さらなる教育目標の明確化とその改善充実、さらに、「横断的な学問分野」「新たな分野の学部」の設置構想をも進めることを目標にしており、改革の強い意欲が感じられます。大学院教育に関しても新しい試みが具体的に述べられており、その実現が期待されます。

また、大学の機能の「研究」に関しては、山口大学が７学部から構成される総合大学であることから戦略的な研究方策が打ち出されており、推進が期待されます。

さらに、大学の３番目の機能である「地域貢献」に関しては、地域と連携し、共に発展することをねらいに「地域連携」とされていることに、創立200周年に向けた山口大学が地域と共に発展するという強い姿勢を感じます。経営協議会の委員として２期４年から３期６年のお手伝いとなりますが「明日の山口大学ビジョン」の推進に少しでもお役に立てれば幸です。

末永　汎本
弁護士
末永法律事務所
経営協議会委員

「明日の山口大学ビジョン」に異論はありません。

しいて言えば、これからの大学は地域との結びつき、国際性、高度の専門化がキーだと考えますから、これらにもっと的を絞っても良かったかと思います。

ところで、最近目にした論稿では藤原正彦教授の「教養立国ニッポン」（文藝春秋2007年12月号）が出色のものでありました。そこには現在の日本の混迷は戦後の経済至上主義と日本人が祖国に対する誇りを失ったことによるものであり、これを建て直すには教養主義の復活しかないことが鋭く、説得的に説かれています。

そして、そのためには大学は実学ばかりを大切にせず、教養的な学部・学科にも力を入れなければならないことが力説されています。

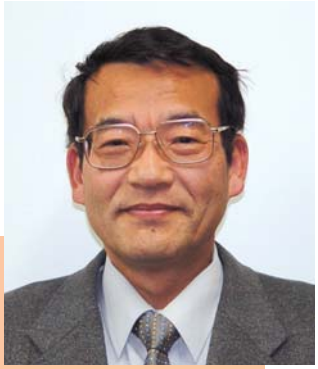
私も全く同感ですが、願わくば山口大学がその先兵となってほしいものです。

福田　浩一
株式会社山口銀行
取締役頭取
経営協議会委員

山口大学は国立大学の法人化後、５年目というひとつの節目の年を迎えます。そして、大学全入時代が到来した今、未来に向かってますますの発展を遂げていくために「2020年にキラリと光る大学へ」というスローガンを掲げ、さまざまな取組みを行っておられます。このスローガン達成のためには、さまざまなカラーのキラリを発見し・はぐくみ・かたちにすること、またそうしてできたたくさんの輝く個を結合し、大学自体の魅力として昇華させていくという観点がとても重要になってくると思います。

『明日の山口大学ビジョン』の「社会連携」で戦略的な広報活動を謳っておられますが、その達成のためには広報に興味をもつ学生を募り、山口大学の魅力を最もよく知る学生たち自身の手で広報活動をしていくという方策も、一例として考えられるのではないでしょうか。若いパワーとみずみずしい発想で、既存の枠を打ち破り、新たなステージへ導いていくことで大学が最も魅力的な形でキラリと光り輝く。そこで得た知識や技術を学生が自分自身の人生や社会に還元し、それを目にした新たな山口大学のファンが入学してくるという、「知の循環」のサイクルが回るようになることが、真の地域貢献を掲げる大学のあるべき姿ではないかと思います。

大学教育機構の再編



塚原　正人　大学教育機構長
（教育学生担当副学長）

教育支援組織の再編（図1）

2008年４月から新たな教育・学生支援を行うため、大学教育機構および８つの全学委員会の組織再編を行いました。機構７センターのうち国際センターは外国語センターと併合し留学生センターに改編しました。また、国際センターの国際交流・協力部門は学長直属の国際戦略室へ、エクステンションセンターは学長直属の社会連携室へ移りました。８つの全学委員会は教学審議会、入試委員会および教学委員会に統合再編されました。このたびの組織再編の狙いは学生支援を包括的に行い、入学から就職・卒業後までの学生支援に関して機動性・機能性・責任性を持たせるとともに、学部委員の負担を軽減し、学部から教育研究評議会・役員会までの機能分担を明確にすることによって、機動的な運営を目指すことにあります。

運営委員会（教学審議会委員と機構専任教授から構成）は大学教育機構の人事・予算などの管理・運営に当たります。教学審議会は入試・教務・学生支援など教学に関する案件の基本方針を策定します。入試委員会と教学委員会は実施組織として実務にあたります。教学委員会は従来の教務・FD・国際交流・学生・キャリアデザイン委員会で取り上げていた案件を扱います。大学教育機構のアドミッションセンター・大学教育センター・学生支援センター・留学生センター・保健管理センターの５センターは教学審議会および教学委員会を支える組織として企画・立案・実施を行います。

学部委員の方々および皆様には、少し戸惑われるかもしれませんが、円滑かつ機能な運営に向けて是非ご協力をお願いいたします。

事務組織の再編（図2）

事務組織の再編も併せて行われました。従来の学務部を学生支援部と呼称変更しました。これは学生サポートを推進する組織として、学生の皆さんに分かりやすいように配慮したためです。学生支援部には教養（共通）教育・教員免許などを扱う教育支援課、学生サービス・就職支援・留学生支援などを扱う学生支援課、入試業務を扱う入試課の３課が帰属しています。また、学生さんがアクセスしやすいように就職支援室と留学生支援室を設けました。

大学教育機構は全学部・研究科の教育・学生支援をサポートする組織です。専任および併任教職員一丸となって、機能的・機動的組織に生まれ変わります。皆さまの温かいご支援とご協力をよろしくお願いいたします。

図１　大学教育機構の再編について

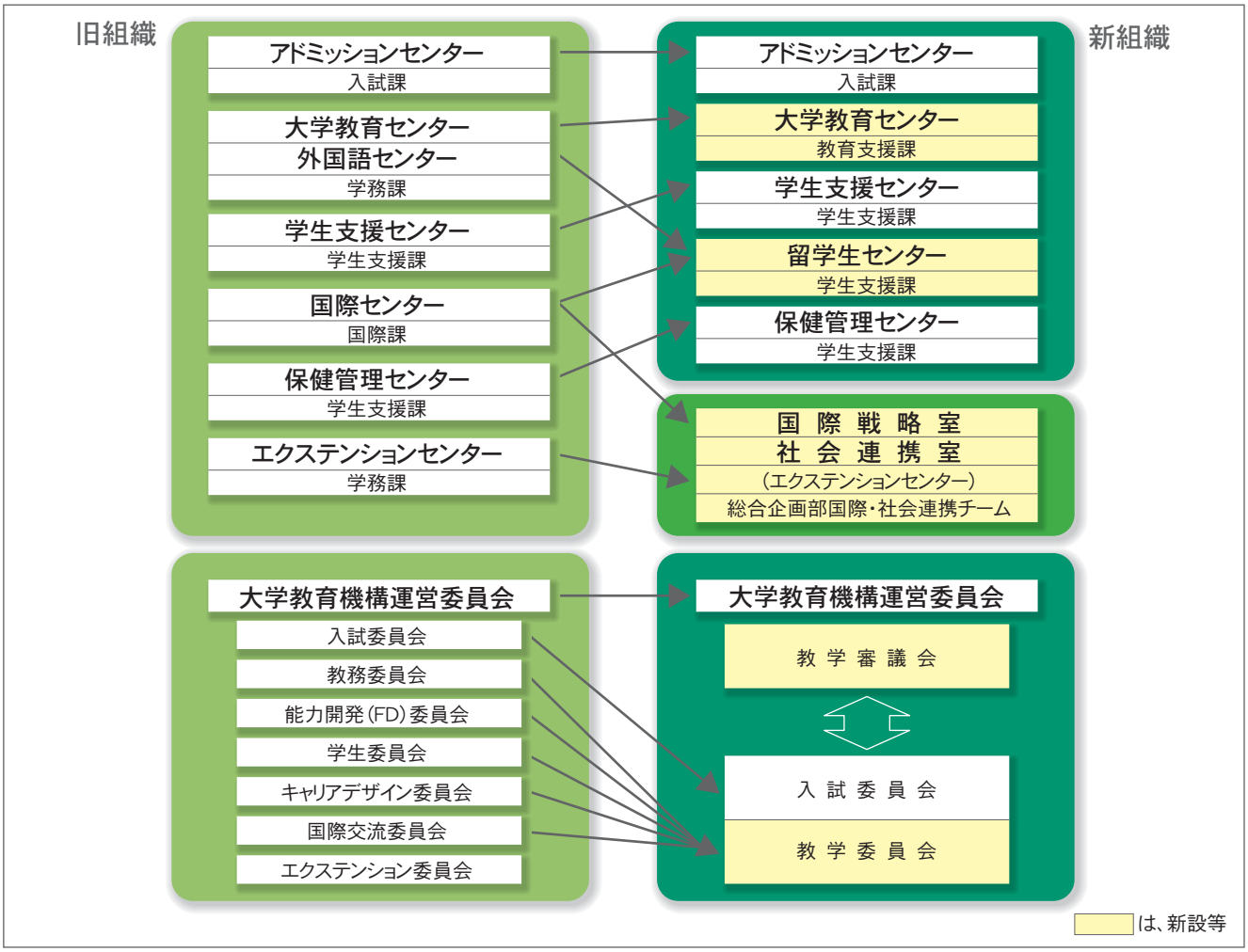
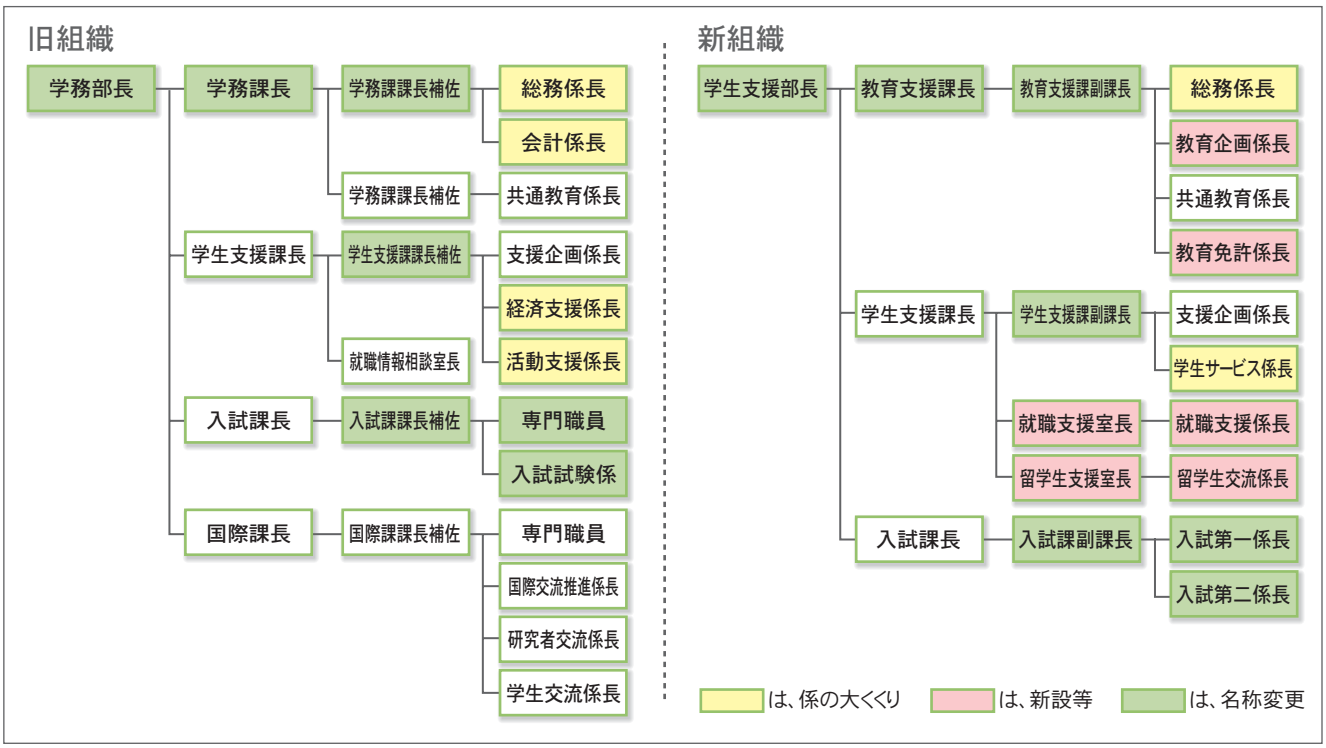


図２　事務組織の再編



「産学公連携・イノベーション推進機構」の組織改編と新たな動き

～地域発イノベーションを目指して～

三木　俊克
産学公連携・イノベーション推進機構長
（学術研究担当副学長）

21世紀になって間もなく10年になろうとしていますが、我々を取り巻く社会は、地球環境問題への対応と解決、持続的発展可能な社会の実現、大都市一極集中の是正と地域再生の実現などの様々な課題に直面しています。そうした中で、社会財である大学への期待はますます高まっており、山口大学もこうした社会からの期待や要請に応えるために、大学の「知」をベースに社会との連携のもとで社会とのバリュー・チェーン（価値連鎖）の形成を目指してきました。

これまで「産学公連携・創業支援機構」は、「地域共同研究開発センター（平成３年設置）」、「ベンチャービジネスラボラトリー（平成７年設置）」、「ビジネスインキュベーション施設（平成15年設置）」、「知的財産本部（平成15年設置）」を傘下におき、大学の「知」の産業分野への活用促進をミッションとし『地域発イノベーション』の実現に寄与する学内組織として、産学官の間のニーズシーズマッチング、知的財産の権利化・活用、大学発ベンチャーの起業支援などを行ってきましたが、「川上（研究）から川下（事業での実用）」までを俯瞰して一貫支援を行うという面では不十分な点もありました。

そこで、平成19年夏から種々検討を重ね、これまでの機構の活動をさらにステップアップすることを目的にして、従来の体制を刷新し、イノベーション創出に向けた活動の強化を図ることにしました。組織的には、センター、施設、本部等の既存組織を廃止し、機構全体の機能を向上させるマネージメントが行えるように部門制（産学公連携支援部門、イノベーション支援部門、知的財産部門）に移行し、活動目標を達成するためのマネージメントシステムも抜本的に見直し、学内外の関係者の期待に応えることにしました。そして平成20年4月には、組織名称も「産学公連携・イノベーション推進機構」へと変更し、この新たな組織体制のもとで諸活動を効率的かつ効果的に実施することになりました。

本学では、イノベーション創出に向け「医工連携」などの取組を他大学に先駆けて実施・展開してきましたが、今後は「農商工連携」など複数分野の大学研究者と産業界とが連携するイノベーション創出事業も進めていきます。また、従来から行ってきた先進的な科学技術の成果を産業界に移転するための活動も引き続き充実しますし、産業界や社会での事業化を睨んだ知的財産に関する戦略的支援、ベンチャー起業へ向けた支援なども継続的に強化することにしています。本機構が特に重視するキーワードは『地域発イノベーション』です。学内外の関係者の皆様とこのキーワードの実現に向けて共に活動していきたいと思います。

なお、「産学公連携・イノベーション推進機構」への改編に伴い、学内外の関係者が利用しやすいWebページの実現を目指し、すでに一部のコンテンツも見直したところです。今後も順次更新していきますので、Webページも利活用していただけると幸いです。

▶機構Webページ
http://www.sangaku.yamaguchi-u.ac.jp/
をご覧下さい。

産学公連携・イノベーション推進機構と連携TLOの体制

機構長（学術研究担当副学長）

副機構長

産学公連携支援部門

◆リエゾン活動
◆産学連携活動

＜スタッフ＞
○産学連携コーディネーター
浜本　俊一、大高　聡
森　健太郎、殿岡　裕樹

○専任教員　田中　義則

○部門長　山本　節夫

イノベーション支援部門

◆イノベーション創出支援
◆プロジェクト支援

＜スタッフ＞
○イノベーション
支援マネージャー
藤井　文武、星田　尚司
吉見　孝則

○部門長　近久　博志

知的財産部門

◆知財の保護・管理
◆契約・法務
◆知財啓蒙活動

＜スタッフ＞
○知財・法務専門職
奥　登志生、加納　好昭
藤本　昌平

○部門長　佐田　洋一郎

連携協働

山口TLO

◆リエゾン活動
◆ライセンシング業務

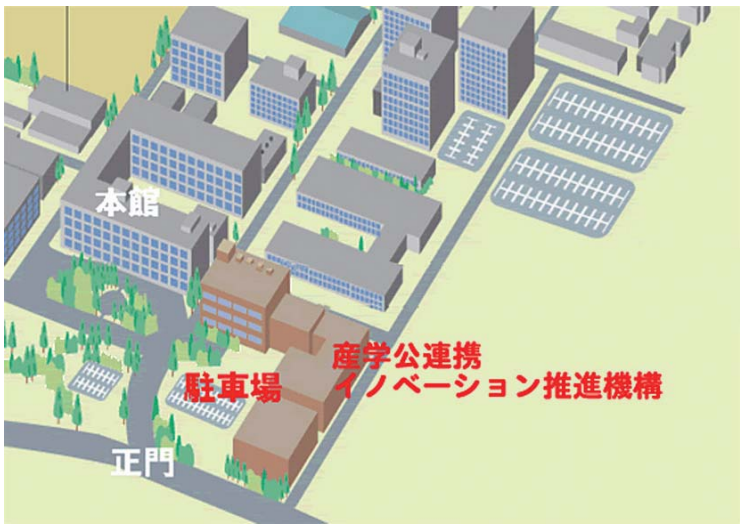
＜スタッフ＞
○技術移転グループ
松崎　徳雄

○技術移転アソシエイト
久富　勝機、井本　良
林　里織

○取締役社長　松浦　満

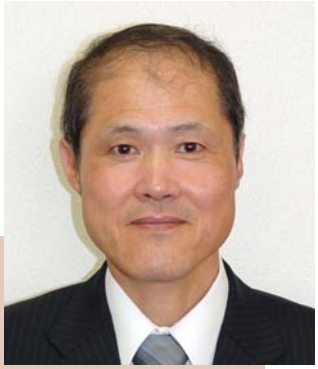
学術研究部　産学連携課

MAP and LOCATION



工学部（常盤）キャンパス

事務組織の再構築について
～事務の簡素化・効率化に向けて～



大元　正康　現：埼玉学園大学事務局長
（前事務局長）

はじめに

本学では、事務の簡素化・効率化を図るため、これまで幾度か事務組織を再編してきたところであります。中でも平成14年７月の再編は大規模なもので、現在の事務組織の母体となっています。

しかしながら、国立大学法人を取り巻く状況は厳しいものがあり、事務分野においても、それに応すべく組織・業務の見直しを行う必要が生じてきております。

このため、平成18年11月に若手職員（係長相当）で構成する「事務組織再編検討員会」を設け、新たな事務組織案を作成していただきました。それを基に事務連絡協議会、企画調整会議、教育研究評議会等において意見を伺い、平成20年４月１日から新たな事務組織の下で業務に携わる体制を構築したところです。

事務組織再編の背景

このたびの事務組織再編にあたっては次の点が背景として強調されます。

①中期計画において、「事務組織の見直しについては、教育・研究組織の編成・見直しを勘案しつつ事務組織の機能・編成を再検討する」と明記していること。

②監事の平成17年度業務監査報告において、「人件費削減、高年齢者等の雇用促進などに対応すべく課題が山積している現状に鑑み、事務組織の大ぐくり化なども含め抜本的な改革を検討されたい」と提起されていること。

③経済財政改革の基本方針2007（閣議決定）において、時代や社会の要請にこたえる国立大学の更なる改革の一つとして、「国立大学の大学事務局の改革による経営効率化を推進する」と提言していること。

事務組織再編にあたってのポイントおよび具体策（主なもの）

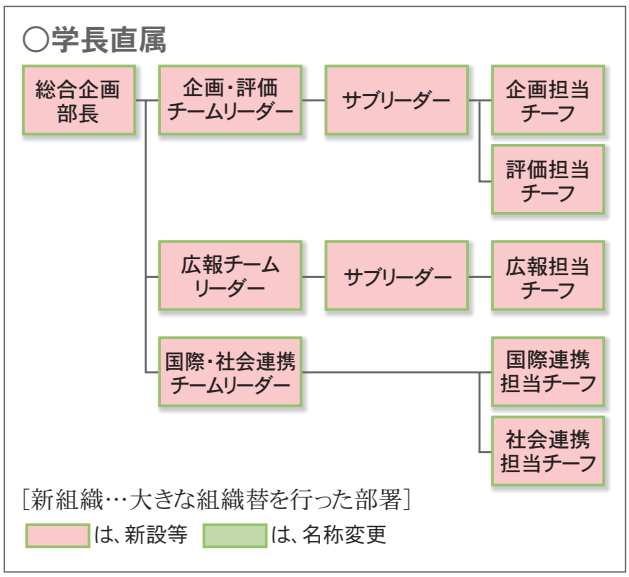
①学長・副学長と大学事務局との連携強化による政策立案体制の整備

→学長直属の組織として「総合企画部」を新設し、チーム制（企画・評価、広報、国際・社会連携の各チーム）を導入。

②業務効率化の視点から学部業務の集約化

→各学部事務部に共通する教員免許関係業務、入試関係業務、留学生関係業務を「学生支援部」に集約。

→職員の給与・諸手当及び福利厚生に関する業務



を「総務部人事課給与福利センター」に集約。

③機動的、効率的に事務処理ができる体制の整備

→「学務部国際課」を廃止し、留学生に関する業務を専ら行う組織として、学生支援課に「留学生支援室」を設置、また、研究交流に関する業務を学術研究部研究推進課に、国際に関する企画業務等を総合企画部国際・社会連携チームに移行。

→人文学部・理学部事務部を２事務部に分離し、それぞれに事務部を配置。

→各学部（工学部、医学部を除く）の「総務企画係」と「予算管理係」を統合。

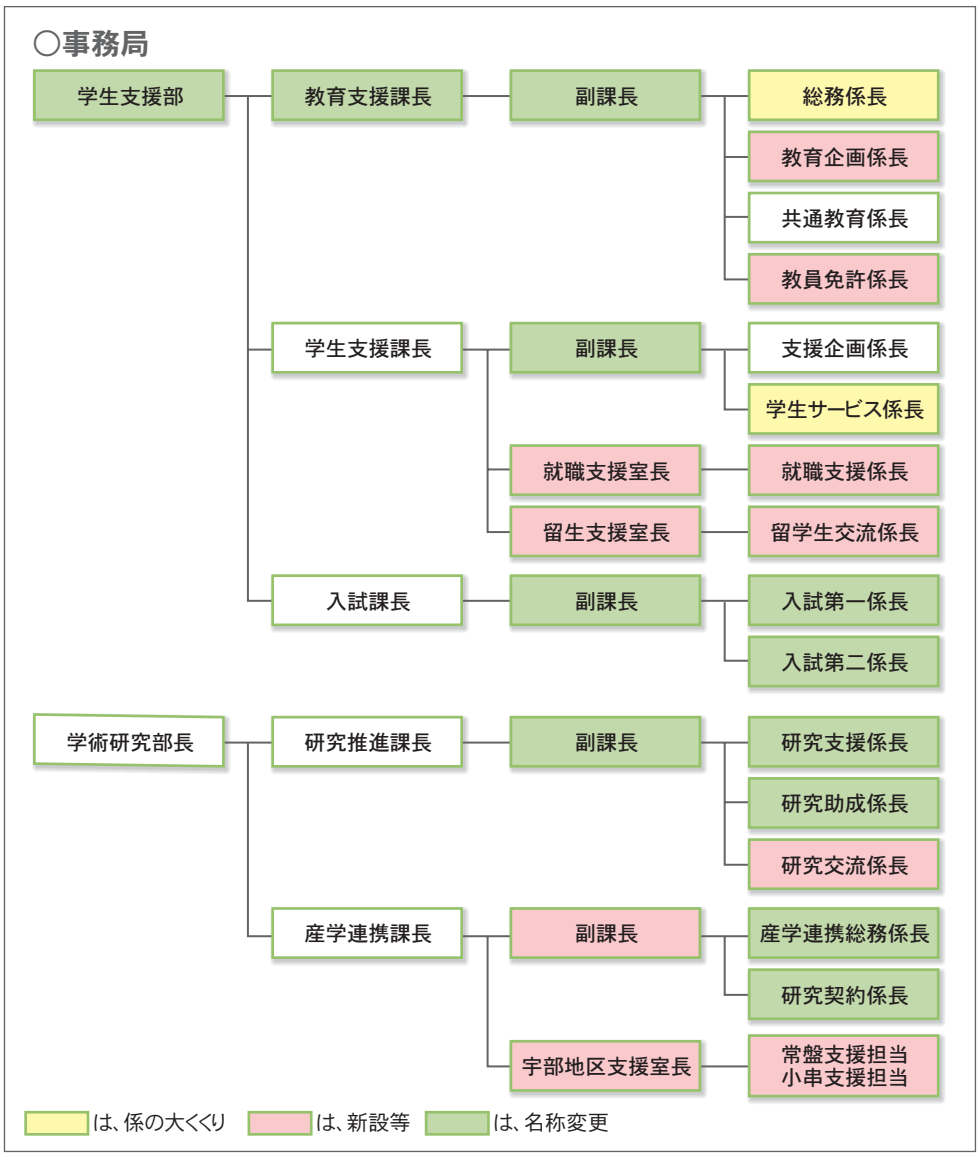
→各課及び各学部事務部における係員等の配置について、各課長および各事務長等が当該課、事務部の業務実態に応じて柔軟な配置が可能。

→課長補佐級の職務（責任）を明確化するため、事務処理規則に明文化するとともに、「課長補佐」を「副課長」に、「事務長補佐」を「副事務長」に名称変更。

おわりに

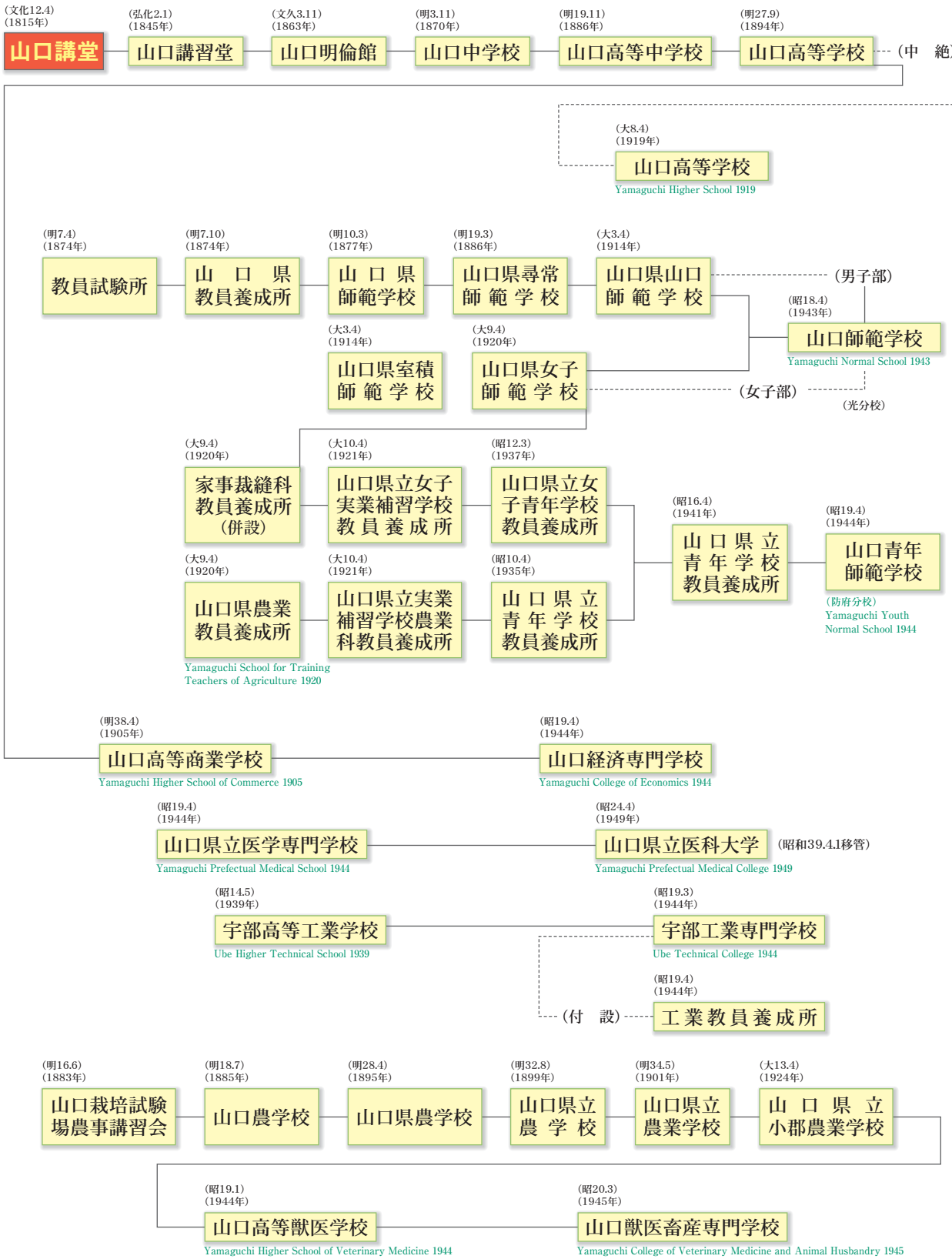
今回の事務組織は恒久的なものではなく、不断に見直し再編することを基調としておりますので、教育研究組織の改編等と相俟ってより効率的な組織として発展させていくことが今後とも必要とされます。

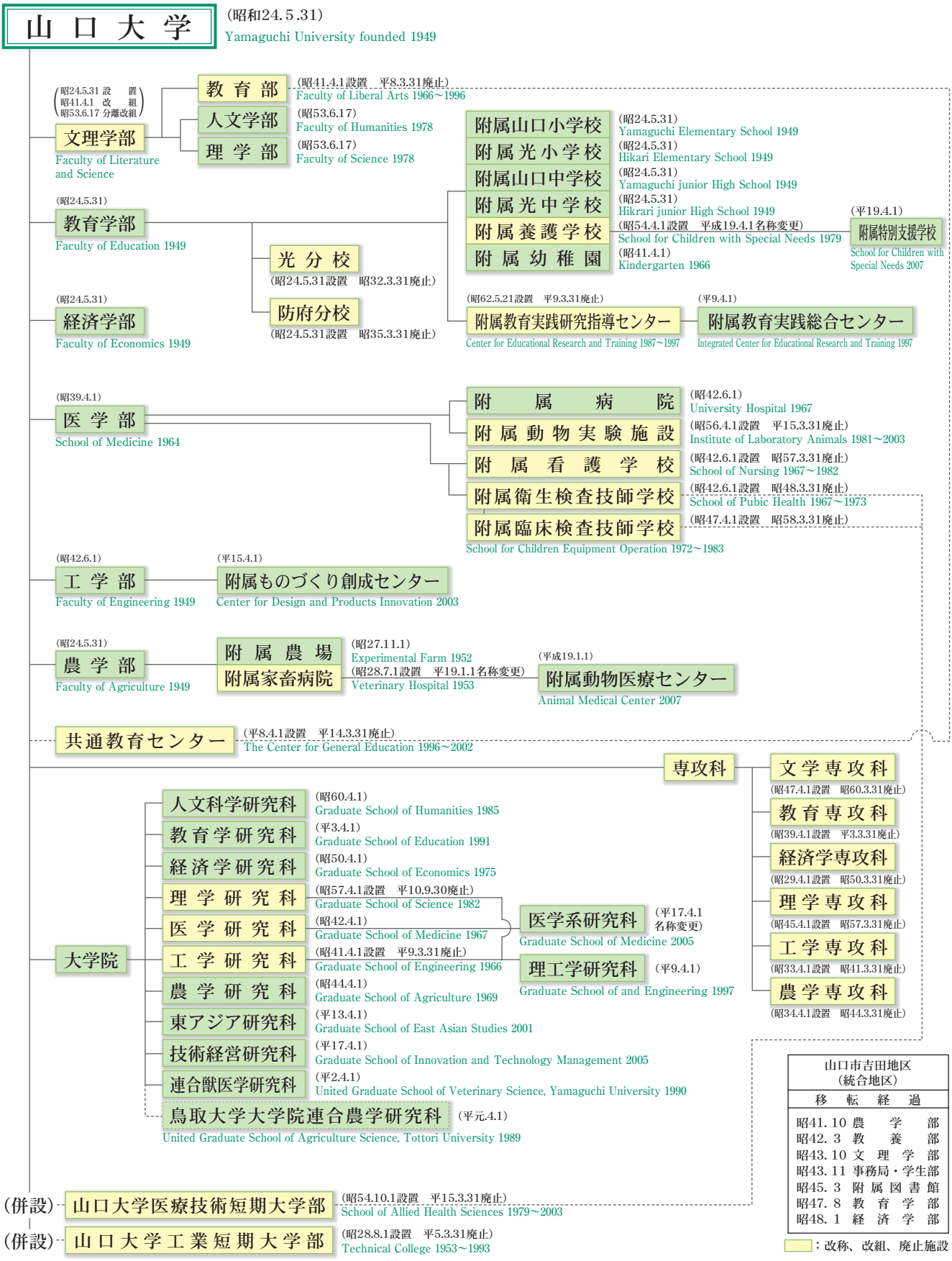
最後になりましたが、今回の事務組織再編案作りにご尽力をいただいた「事務組織再編検討委員会」の委員皆様に感謝を申し上げます。



沿革 Historical Sketch

◎山口大学は、2015年に本学の前身である山口講堂の設立（1815年（文化12年））から200周年という節目を迎えます。ここで、山口大学の沿革を紹介します。




山口大学
(昭和24.5.31)
Yamaguchi University founded 1949
(昭24.5.31 設置 昭41.4.1 改組 昭53.6.17 分離改組)
文理学部
Faculty of Literature and Science
教育部
(昭41.4.1設置 平8.3.31廃止)
Faculty of Liberal Arts 1966～1996
人文学部
(昭53.6.17)
Faculty of Humanities 1978
理学部
(昭53.6.17)
Faculty of Science 1978
(昭24.5.31)
教育学部
Faculty of Education 1949
光分校
(昭24.5.31設置 昭32.3.31廃止)
防府分校
(昭24.5.31設置 昭35.3.31廃止)
附属山口小学校
(昭24.5.31)
Yamaguchi Elementary School 1949
附属光小学校
(昭24.5.31)
Hikari Elementary School 1949
附属山口中学校
(昭24.5.31)
Yamaguchi junior High School 1949
附属光中学校
(昭24.5.31)
Hikrari junior High School 1949
附属養護学校
(昭54.4.1設置 平成19.4.1名称変更)
School for Children with Special Needs 1979
(平19.4.1)
附属特別支援学校
School for Children with Special Needs 2007
附属幼稚園
(昭41.4.1)
Kindergarten 1966
(昭62.5.21設置 平9.3.31廃止)
附属教育実践研究指導センター
Center for Educational Research and Training 1987～1997
(平9.4.1)
附属教育実践総合センター
Integrated Center for Educational Research and Training 1997
(昭24.5.31)
経済学部
Faculty of Economics 1949
(昭39.4.1)
医学部
School of Medicine 1964
附属病院
(昭42.6.1)
University Hospital 1967
附属動物実験施設
(昭56.4.1設置 平15.3.31廃止)
Institute of Laboratory Animals 1981～2003
附属看護学校
(昭42.6.1設置 昭57.3.31廃止)
School of Nursing 1967～1982
附属衛生検査技師学校
(昭42.6.1設置 昭48.3.31廃止)
School of Pubic Health 1967～1973
附属臨床検査技師学校
(昭47.4.1設置 昭58.3.31廃止)
School for Children Equipment Operation 1972～1983
(昭42.6.1)
工学部
Faculty of Engineering 1949
(平15.4.1)
附属ものづくり創成センター
Center for Design and Products Innovation 2003
(昭24.5.31)
農学部
Faculty of Agriculture 1949
附属農場
(昭27.11.1)
Experimental Farm 1952
附属家畜病院
(昭28.7.1設置 平19.1.1名称変更)
Veterinary Hospital 1953
(平成19.1.1)
附属動物医療センター
Animal Medical Center 2007
共通教育センター
(平8.4.1設置 平14.3.31廃止)
The Center for General Education 1996～2002
専攻科
文学専攻科
(昭47.4.1設置 昭60.3.31廃止)
教育専攻科
(昭39.4.1設置 平3.3.31廃止)
経済学専攻科
(昭29.4.1設置 昭50.3.31廃止)
理学専攻科
(昭45.4.1設置 昭57.3.31廃止)
工学専攻科
(昭33.4.1設置 昭41.3.31廃止)
農学専攻科
(昭34.4.1設置 昭44.3.31廃止)
大学院
人文科学研究科
(昭60.4.1)
Graduate School of Humanities 1985
教育学研究科
(平3.4.1)
Graduate School of Education 1991
経済学研究科
(昭50.4.1)
Graduate School of Economics 1975
理学研究科
(昭57.4.1設置 平10.9.30廃止)
Graduate School of Science 1982
医学研究科
(昭42.4.1)
Graduate School of Medicine 1967
工学研究科
(昭41.4.1設置 平9.3.31廃止)
Graduate School of Engineering 1966
医学系研究科
(平17.4.1 名称変更)
Graduate School of Medicine 2005
理工学研究科
(平9.4.1)
Graduate School of and Engineering 1997
農学研究科
(昭44.4.1)
Graduate School of Agriculture 1969
東アジア研究科
(平13.4.1)
Graduate School of East Asian Studies 2001
技術経営研究科
(平17.4.1)
Graduate School of Innovation and Technology Management 2005
連合獣医学研究科
(平2.4.1)
United Graduate School of Veterinary Science, Yamaguchi University 1990
鳥取大学大学院連合農学研究科
(平元.4.1)
United Graduate School of Agriculture Science, Tottori University 1989
(併設)
山口大学医療技術短期大学部
(昭54.10.1設置 平15.3.31廃止)
School of Allied Health Sciences 1979～2003
(併設)
山口大学工業短期大学部
(昭28.8.1設置 平5.3.31廃止)
Technical College 1953～1993
山口市吉田地区
(統合地区)
移転経過
昭41. 10 農学部
昭42. 3 教養部
昭43. 10 文理学部
昭43. 11 事務局・学生部
昭45. 3 附属図書館
昭47. 8 教育学部
昭48. 1 経済学部
：改称、改組、廃止施設

山口講堂と上田鳳陽先生

藤井　大司郎　経済学部長

山口大学の歴史をその淵源にまで遡れば、1815年（文化12年）４月に建学の祖である長州藩士上田鳳陽先生が造営した「山口講堂」に至ります。現七学部中最も古い歴史をもつ経済学部の前身山口高等商業学校の校歌の歌詞に「基（もとい）を文化の遠きにおきて」とあるのは、これを指しています。経済学部の玄関前には三つの歌碑がありますが、玄関に向って左側の最も校舎に近い歌碑にこの校歌（土井晩翠作詞、山田耕筰作曲）が刻まれていますので、一度ご覧ください。本学の歴史は間もなく200年を迎えます。

では、山口講堂はどこにあったのでしょうか？古書をひもといてみますと、それはどうやら、現在の山口市公設市場（古い住所では「中河原第八番地」）の辺りと思われます。向かい側には、毛利家藩主（当時は萩に居住）が参勤交代の際の休息所としていた「山口茶館」があった場所です。わが鳳陽先生は、金持ちの農民や商人にも相談し、同年の２月に藩に願い出て、前からあった武芸稽古場の隣に建てています。藩も先生の情熱を受け容れ、若干の資金を出すとともに、建築用材を藩有林から採取することまで認めています。多分、その土地も藩のものだったのでしょう。長州藩はそれだけ教育熱心な藩でしたし、鳳陽先生が学者、教育者として藩から高い評価を受けていたことがうかがえます。鳳陽先生47歳の時のことです。

建設期間がわずか２カ月前後ですから、当時の建物としてもそんなに大きいものではありません。現に、講堂は正面幅が約10m、奥行きが約7.3mで三面に回縁のついた建物（多分平屋でしょう）で、現在の米屋町・中市商店街の方に向って本門が開いていたと言います。敷地の中央が講堂で、その南方には槍術場、裏側には剣術場、北の隅には小さな書庫が以前から建っていましたが、（武芸所に対する意味での）文学所が山口になかったことが鳳陽先生には残念で仕方なかったのです。

鳳陽先生はどんな人だったのでしょうか？先生は山口（市）の生まれです。だいいち「鳳陽」という号が「鳳翩山の南」に住んでいる、と言っています。1769年（明和６年）に長州藩士宮崎猪兵衛在政（いひょうえありまさ）の三男に生まれ、幼いときに上田平右衛門清房（へいえもんきよふさ）の養子になっており、本名は纘明（つぐあき）、通称幾之允（いくのじょう）、後に茂右衛門（しげえもん）と改めています。

小さい頃から学を好み、萩の藩校明倫館に入ると、後に長州藩の大儒学者となる山県太華（やまがたたいか）とは特に親しい仲となり、いつも互いに論じ合っては切磋琢磨し、志を語り合いました。ある時、若き鳳陽先生は太華に向って奮然とした様子でこう言いました。「大丈夫（立派な男子は）まさに天下を経理するを以て志とすべし。何（いづくん）ぞ區々（くく：こまかいことにこだわって）章を尋ね、句を摘む事を之（こ）れ為（な）さん。且（そして、）彫虫（ちょうちゅう：字句をかざりつくろうこと）は末技（つまらぬこと）、叉何ぞ歳月を玩愒（がんかつ：いたずらに過ごすこと）せん哉」と。

また、先生は人一倍人情に厚い人柄で、かつ感激の性であったと伝えられています。学舎では日夜読書をして倦むことがなく、真理発見に狂喜するかと思えば、自分を罵り哭（な）くといった様子で皆を驚かせていますし、藩主の前などで講義している時でも、講じている自分が感動のあまり絶句してしまうということもよくあったそうです。友人が尊皇攘夷の志士となってこっそりたずねてきた時などは、必ず大喜びして酒食でもてなし、帰る時には、雨の中であろうとどこまでも名残を惜しんでついてくるので、友人が「もう本当に結構です」と言うと、今度は路傍の石に腰掛け、友人の姿が見えなくなるまで見送り続けるといった有り様でした。熱血先生なのです。

山口講堂は、その後1845年（弘化２年）に「山口講習堂」と名称を改め、鳳陽先生が85歳で亡くなった後も、同僚や弟子たちが引き継ぐとともに、藩の支援も受け続けますが、場所が狭く、町家が近いこともあり、1861年（文久元年）には後の山口高商・経済学部旧校舎の位置、亀山東麓（通称静間屋敷）に移転することになります。それ以来、1973年（昭和48年）に現平川地区に本学が統合移転されるまでの112年間、母校の歴史はこの地で刻まれ続けることとなります。

TOPICS 2008

山口大学入学式　学長挨拶

丸本　卓哉
山口大学長

山口大学および大学院への入学おめでとうございます。また、今日まで入学生の皆さんを支援して下さったご家族・保護者の方々に感謝を申し上げますと共に、心よりお祝いを申し上げます。

国立大学が法人化して５年目を迎えます。国の財政が厳しいために国立大学法人も厳しい状況にありますが、心配はいりません。山口大学の国内ランキングは全国立大学87校中総合力で約23～25位です。教育力では全国８位で地域総合大学として高い評価を得ています。私共教職員一同力を合わせて、たくましい人間力に富んだ人材育成に取り組んでおりますので、ご安心いただきたいと思います。本学は国際的に活躍できる人材育成をひとつの目標にかかげ、外国語コミュニケーション能力の充実や海外留学の促進にも力を入れていきます。各種の奨学制度や留学制度を持っていますので、ぜひチャレンジしてほしいと思います。

山口の持つ独特の歴史と文化、風土や人情は、吉田松陰先生以来チャレンジ精神に富む多くの優れた逸材を輩出しています。なかでも、1860年代に当時の長州藩より英国のロンドン大学に留学し、帰国後日本の近代化に貢献した５人の若人＝「長州五傑（長州ファイブ）：伊藤博文『初代総理大臣』、井上　馨『初代外務大臣』、井上　勝『鉄道行政に貢献』、遠藤謹助『造幣事業に貢献』、山尾庸三『工業近代化・工学教育に貢献』」はその代表的な人物です。この山口で、そのチャレンジ精神を学び育ってほしいと願っています。

応援団によるエール

山口大学の理念は、「発見し・はぐくみ・かたちにする　知の広場」です。自分の驚きや個性・能力を発見し、勉学しながら人間力を育み、社会人としての自分をかたちにするという「山大スピリット」を表しています。山口大学では、初等・中等教育で皆さんが受けてきた教育（Teaching）ではなく、教員と学生が相互に刺激し合いながら共に育つ共育（Education each other）を目指しています。皆さんも今までの受け身の学習ではなく、自ら積極的に勉学し、先生方に疑問や質問を投げ返し、キャッチボールをしながら共に育つことが求められます。これは、皆さんが高等学校までに受けてきた学習システムと180度異なるために、最初は戸惑いがあるかと思いますが、努力していただき、一日も早く大学の勉学システムに慣れてもらいたいと願っています。最初の３カ月、夏休みまでが大切です。スタートに出遅れると後半大変ですから、しっかり頑張っていただきたいと思います。

最後になりますが、皆さん方の山口大学での勉学生活が、充実した実りのあるものになることを祈念して、お祝いの挨拶といたします。

TOPICS 2008

教育学部に「小学校教育コース」を設置

吉田　一成
教育学部長

「疑問を持つこと」「考えること」、そして、自分の考えたこと感じたことを子どもと、同僚の教師と、保護者と、地域社会の人々と、そして私たち大学の教師と「共に伝え合う力」、「共に育ち続ける『志』」を育てること－

これが、来年度新設する小学校教育コースの学生を育てる理念です。近年、教育現場では、学ぶ意欲の低下、いじめや不登校、学習障害などを抱えた子どもへの適切な支援など教育課題が複雑・多様化しています。こうした多様な課題に対応できる課題解決的な実践力とともに、保護者や地域住民の理解と協力を得ながら教育活動を進めることのできる人材の養成が求められています。また、今後の教員の大量退職や学級編成の弾力化などに伴う教員需要、特に、小学校教員の需要数に対応するために、山口大学教育学部は、質的な側面を保障した仕組みを導入して「質の高い教員養成」を展開することが求められています。

教育学部では、学部改革の短期・中長期指針を策定し、教員養成への積極的な取組み策として、GP（good practice）などの競争的資金に対する申請も行ってきています。平成17年度から教員養成GPとして認められた「『ちゃぶ台』方式による協働型教育研修計画」では、学生が子どもと継続的に関わる多様な場と、学生・現職教員・大学教員等が協働して課題や失敗を分析・評価し、言語化して蓄積する省察の場（ちゃぶ台ルーム）を提供しました。その後も、この『ちゃぶ台方式』は、理科教育・社会科教育といった専門教科、さらには新任教員の研修にまで対象を拡充して展開されています。これらプロジェクトにおける方法や成果をフィードバックし、体験－省察型の演習を中心としたカリキュラム（図１参照）を運用するのが新たに設置する「小学校教育コース」です。このコースを教育学部の新たな教員養成モデルとして位置づけ、実効性のあるシステムとして確立していきたいと考えています。

３月に行われた記者発表の様子

具体的なカリキュラムとしては、幅広い学年差や発達段階を考慮した「子ども理解」、子どもたちが喰らいついてくる「学習指導」、地域や保護者等との連携による「協働実践」という３つの柱をたて、それぞれの系に専門的な体験－省察型の科目を配置しています。

また、学校運営においても、上述した諸課題を含めて、教員としての本来の職務を遂行するためには、「学校は一つの組織体」という認識を持ち、「教員が互いに支えあいながら協調的に課題解決する機能」や「同僚性」を共有することが重要です。従来から存在する「教科専門性」をベースに専門性と指導力を深めていく「教科教育コース」および「国際理解教育コース」、加えて、新たに設置する「小学校教育コース」は、「教育臨床」をベースにした子どもに対する具体的なイメージから子ども理解力や指導力、コミュニケーション能力やコーディネートスキルを身につけながらリーダーシップがとれる教員を目指しています。これらの３つのコースが各々の分野の高度化を図りながら、山口大学独自の「ちゃぶ台ルーム」において、各教科の専門性や教育臨床力を相互補完的に結びつけ、協働性と同僚性を核にさらに質の高い小学校教員を養成できると考えています。

最後に、この小学校教育コースの設置に、構想段階からリーダーとしてご尽力頂きました故杉山緑教授に深く敬意と謝意を捧げるとともに、同教授のご冥福をお祈り致します。

山口大学教育学部学校教員養成課程初等中等教育系小学校教育コース

【教育理念と目標】

①児童期の各発達段階とその発達特性に応じた実践的指導力を備えた教員を養成する。

②教職員や保護者と連携して共感的・協働的に活動できる教員を養成する。

③地域社会と協働し、これからの学校教育を総合的・創造的に担う力量のある教員を養成する。

【入学定員】 30名（AO入試　20名，一般選抜　10名）

【コース紹介Webページ】http://www.edu.yamaguchi-u.ac.jp/~esec　参照

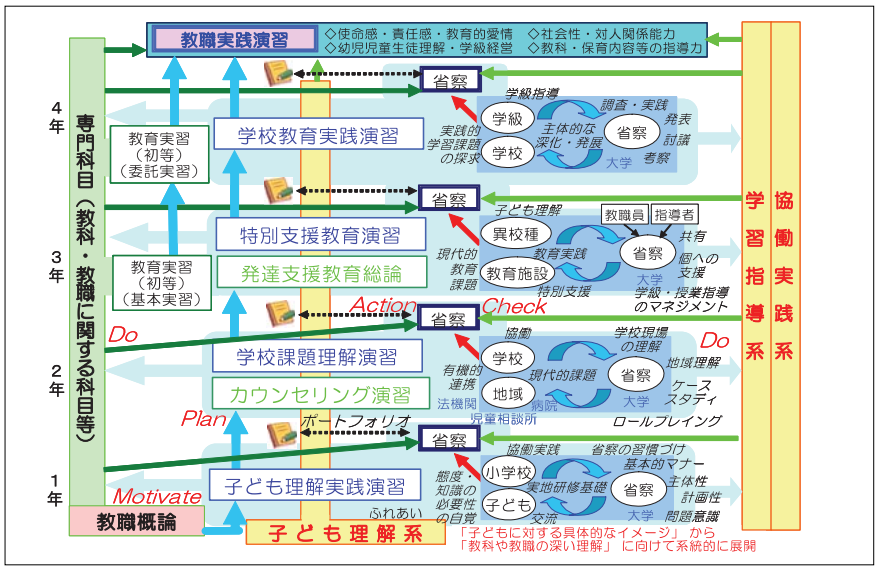


図１：「実践－省察型演習」を柱としたカリキュラム

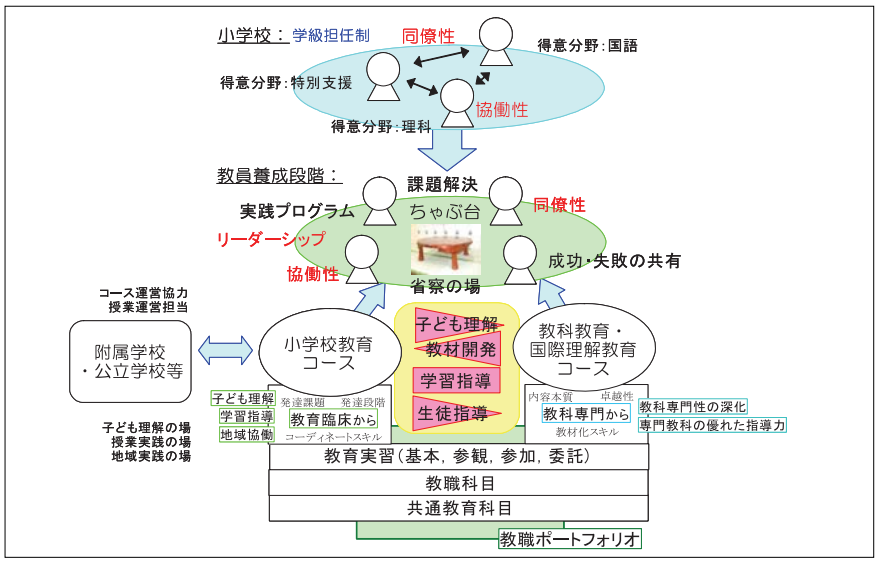


図２：『ちゃぶ台方式』を活用した質の高い小学校教員養成

▶学内連絡先
教育学部　岡村　吉永　教授
TEL：083-933-5397
E-mail：okasun@yamaguchi-u.ac.jp

大学院経済学研究科「医療・福祉経営コース」設置について

羽生　正宗
教授　経済学部

設置の目的

現在、我が国の医療・福祉経営領域では、多くの解決すべき問題が山積しています。それは、生命科学の急速な進歩、社会保障財源の逼迫、医療の安全に対する信頼のゆらぎ、患者の権利の主張、医療・福祉経営の非効率性と規制緩和、医師をはじめとする医療・福祉専門職・技術職の不足や偏在などです。また長期にわたる医療費抑制政策のもとで医療経営は疲弊し、特に急性期医療が危機に瀕しています。さらに我が国の地域医療を支えている自治体病院の約８割が経営上の赤字を抱えている状況にあり、地域医療の崩壊が叫ばれています。

このような問題状況の中で、特に今深刻な経営問題に直面している医療・福祉施設に求められているものは、医療に関する専門的知識のみならず、リスクを抱えた企業としての病院および福祉施設経営の視点、国民経済と社会保障・公共政策についての知見、解決型の知識をも具備した総合的判断力・実践力を備えた人材にほかなりません。しかしそれに対応するための医療・福祉経営専門家の人材の供給が追い付いていないばかりか、養成する環境も整っていないのが現状です。

こうした問題に応えるため、大学院経済学研究科に「医療・福祉経営コース」を2009年４月に設置することとなりました。

医療・福祉領域におけるマネジメント理論やマネジメント教育は、今や我が国に最も必要とされる分野となっています。

医療・福祉経営コースの特徴

現在、医療経営の人材養成講座（病院管理学講座等）をもつ国立大学としては、いずれも首都・指定都市に立地した旧帝大系の３大学だけであり、しかも、それらはいずれも医学系大学院に置かれています。本研究科のように経済学部を基礎とする社会科学系の大学院で医療経営人材養成を行なうことにより、医療専門家による経営者とは異なる多様で新たな経営視点を備えたソリューション型マネジメントに卓越した医療・福祉経営人材を送り込むことができるならば、まさに先駆的役割を果たすことになります。

欧米に比べ立ち遅れているわが国の医療経営人材養成に、国も積極的に取り組み始めており、全国的に医療経営人材養成への期待、特に国立大学法人に対する期待は大きいものであります。

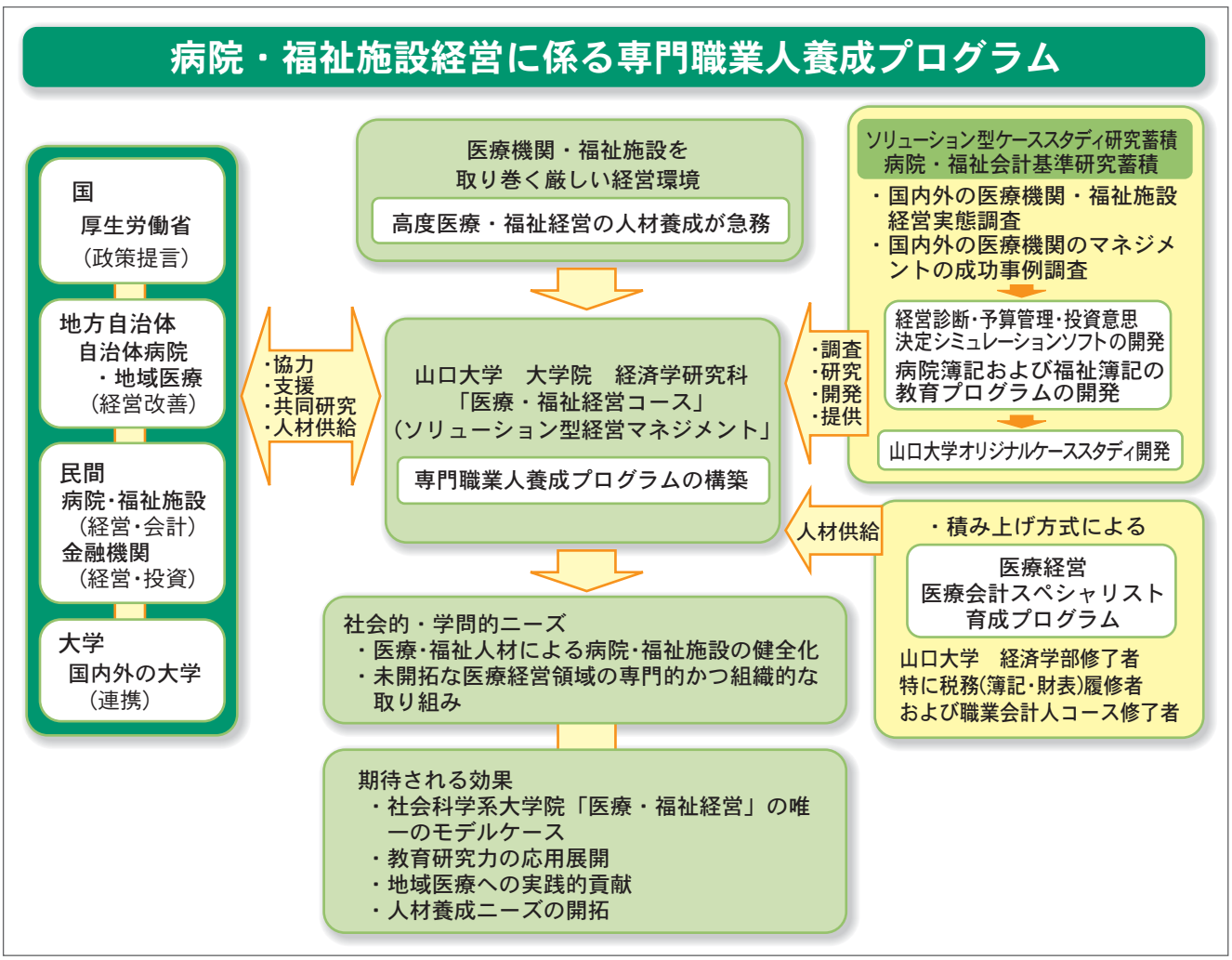
このように全国的にもほとんど例のない社会科学系、とりわけ経済学系の先駆的医療経営コースとして、またわが国の医療・福祉機関の明日を担う新しいタイプの医療・福祉経営人材養成機関として、経済学研究科「医療・福祉経営コース」の設置は、大いに期待されるところであります。

今後経済学研究科で開発する医療・福祉領域のオリジナルケースを基に、病院、福祉施設経営の立場で、意思決定の疑似体験を繰り返し、これらの局面での経営的課題を解決する能力を徹底的に身に付けるカリキュラム構成とした教育プログラムを目指しています。

本コースは、主として社会人を対象とするため、夜間、土曜日など弾力的開講制とします。

地域医療への実践的貢献

本学は２つの大都市圏に東西から挟まれた広い分散型都市構造をもつ山口県域に立地し、周囲には過疎の中山間地、離島地も多く、地域の医療・福祉の経営において大都市地域とは異質の困難な課題が山積しています。地域に立地する基幹総合大学の学部・研究科として、他の学部・研究科、特に医学部と手を携えてこのような課題に積極的に取り組むことで、経済系教育研究機関による特徴的な実践的地域貢献を果たすことが出来るものと考えています。



▶学内連絡先
TEL：083-933-5524
E-mail：hanew@yamaguchi-u.ac.jp

特許情報利用に関する「山口大学・三重大学合同公開セミナー」報告

木村　友久
教授
大学院技術経営研究科　知的財産マネジメント講座

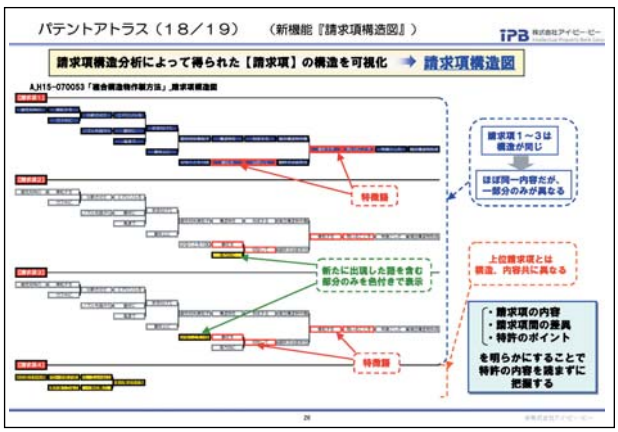
●公開セミナー報告

平成19年度特許庁受託研究『大学研究におけるパテントマップを用いた特許情報の活用についての研究』の成果普及をはかるため、平成20年２月22日(金)に田町キャンパスイノベーションセンター国際会議室で公開セミナーを実施いたしました。今回は、別の特許庁受託研究を進めている三重大学の知財教育セミナー（午後の部）と合同開催の形をとり、山口大学は下記の日程で午前の部を受け持ちました。年度末の多忙な時期にもかかわらず、当日飛び込みを含め70人弱の参加をいただき白熱した意見交換を実現することができました。

記

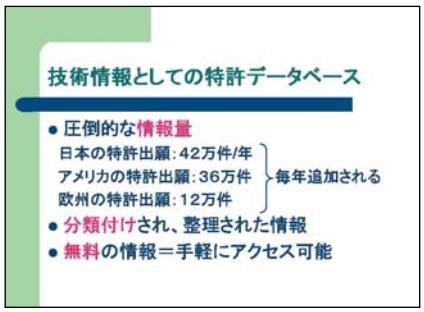
主催：山口大学・三重大学
後援：フィンランド大使館、日本知財学会
午前のプログラム：山口大学担当
テーマ：「大学研究者の特許情報活用を考える」
９：50～９：55
　開会行事　特許庁挨拶
特許庁知的財産活用企画調整官　瀧内健夫氏
９：55～10：00
　山口大学挨拶　産学公連携・創業支援機構
　現：産学公連携・イノベーション推進機構
　　知的財産本部長　佐田洋一郎
10：00～10：20
　特許情報活用モデル調査報告
　　技術経営研究科　木村　友久
10：20～10：50
　特許情報の「可視化」を通じた研究開発における戦略的活用について
　株式会社アイ・ピー・ビー事業統括本部
　大学・公共法人部長　福田　茂則氏
10：50～11：20
　研究開発と特許情報
　株式会社ホエブス代表取締役　川上由基人氏
11：30～12：10
　パネルディスカッション
　会場の皆様とともに、大学研究者の特許情報活用の現状と方向性を議論いたしました。
12：10～12：20
　閉会行事　午後：三重大学担当

福田茂則氏からは、民間特許情報提供会社の立場から主として請求項文言の自動解析システムの紹介がなされました。なお、福田氏の所属する株式会社アイ・ピー・ビーは「特許四季報」を発行している会社です。



（図表１）福田氏スライド抜粋

次に、川上由基人氏から、同氏の企業での技術開発担当と知財部門担当という経歴を生かして、特許情報の研究活用のお話をいただきました。



（図表２）川上氏スライド抜粋

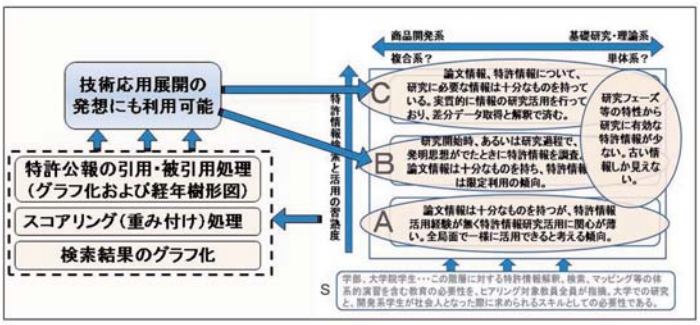
その後、木村の研究報告も併せたパネルディスカッションが行われました。パネリストには、福田氏、川上氏に、佐田教授と本校特許検索システム開発の主力メンバーである安藤竜馬氏が加わり、特許検索システムやマッピングのあり方、特許情報を研究者が活用する際の留意点等々の議論が行われました。フロアーからのご

提案も多く、他大学参加者の特許情報活用への期待や、山口大学特許検索システム（YUPASS）への関心の高さを確認することができました。

（図表３）パネルディスカッションの様子

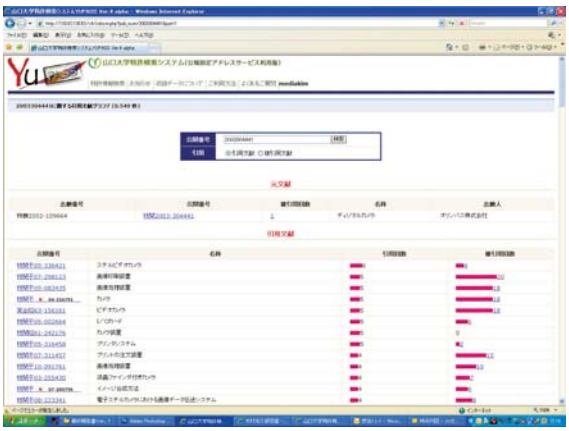
●本受託研究の成果

本研究は、平成18年度の特許庁受託研究「大学における研究者用特許情報データベース活用モデルの構築と検証」をさらに進めた研究です。昨年の研究で、図表４右欄にあるように、Ａ：論文情報は把握しているものの特許情報の活用経験がなく特許情報の研究への活用に関心が薄い研究者、Ｂ：論文情報・特許情報を一通り把握している研究者、そしてＣ：論文情報・特許情報を研究情報として整理し必要な情報は技術マップまで含めて十分に把握している研究者の三類型が存在することが判りました。今回の研究は、主として特許情報調査を行っていないＡ研究者グループをターゲットに、無料で安易なマッピングシステムを開発して検証すること、そして最終的には大学の研究開発力向上を後押しする事を目的としたものです。

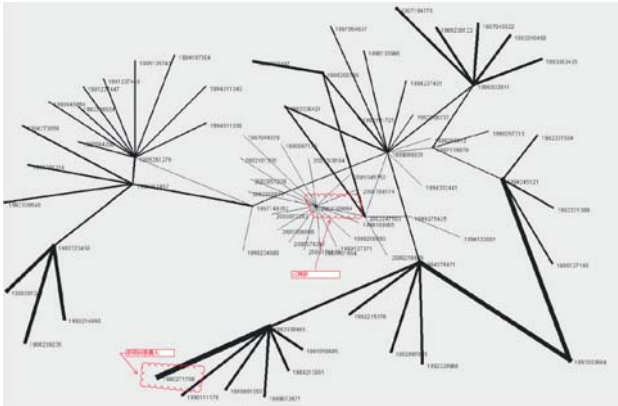


（図表４）研究者のスタンス別分類と対応策

今回開発したパテントマップ作成ソフトは、①検索結果を３カ月毎の特許出願件数推移でグラフ化するソフト、②単独あるいは複数組み合わせた検索語句をスコアリング処理、すなわち検索語句に研究者が任意に重み付け計数を設定してその結果を表示するソフト、③個別特許公報に用意されている整理標準化データ中の引用データベースに記録されている特許公報番号、および特許公報本文から抽出した特許公報番号を利用して、キーとなる特許公報からの引用関係を可視化するソフトの３種類です。なお、後者の、特許公報引用関係可視化ソフトは、当初、キーとなる特許公報から過去方向への引用関係を見るソフトとして開発していました。しかし、研究者ヒアリングの過程で、過去方向への引用関係を把握した後に、重要特許・基本特許と思われる公報が見つかったら（当該特許公報が引用された回数が多い）、その公報の被引用関係を将来方向に可視化するとその後の展開が理解できるという御意見をいただき、その機能を組み込んだ改良を行っています。



（図表５）特許公報の引用・被引用関係マップ画面例



（図表６）特許公報の引用・被引用関係系統図例

●今後の展開

５月には従来の山口大学特許検索システムに、これらのマッピングシステムを統合いたします。無料ですから、是非ご利用下さい。本年度はこれらの利用方法セミナーも開催する予定ですから、これについても皆様のご意見をお寄せ下さい。

※昨年と今回の報告書は下記サイトに収録しております。

http://t-kimura03.cc.yamaguchi-u.ac.jp/exterorg/hou006.html
http://t-kimura03.cc.yamaguchi-u.ac.jp/exterorg/hou007.html

▶学内連絡先
TEL：0836-85-9909　FAX：0836-85-9877
E-mail：t-kimura@yamaguchi-u.ac.jp

おもしろプロジェクトと4大学間交流

小宮　克弘
学生支援センター長
（大学院理工学研究科・教授）

山口大学には10年以上も前から続いている「おもしろプロジェクト」という企画があります。これは学生の正課外の自主的な活動に大学が経費面での援助をし、学生の自主性や創造力の向上を図ろうという取組です。

今から12年前の平成８年、私は選考会議の一員として第１回のおもしろプロジェクト採択のための審査に加わりました。学生から応募のあった35件のプロジェクトの書面審査を行い、採択する10件程度のプロジェクトもあらかた決まり、選考会議も終わろうとしていたとき、ある委員が「こんなプロジェクトも私はいいと思うんですけども……」と遠慮がちに言いました。それに対して他の委員[注1)]が「そうですねぇ……」と同調して最後に滑り込んだプロジェクトが「めだかの学校」[注2)]でした。「めだかの学校」はその後毎年連続して採択され、現在ではおもしろプロジェクトの象徴的存在となりましたが、第１回目の選考会議では滑り込み採択だったのです。

今年の３月、私は12年ぶりにおもしろプロジェクトの選考会議に加わりました。発足当初は書面審査のみでしたが、最近では応募の学生たちにプロジェクターを使ってプレゼンテーションをしてもらっています。

このおもしろプロジェクトの取組が平成17年、文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」（略称「特色GP」）に採択され、学生支援センター内に自主活動ルームが設置されました。教員１人、職員３人を配置し、学生による各種の自主的活動を支援しています。この取組は他大学の強い関心を呼び、時々関係者が視察に訪れることもあります。

昨年は上・下巻合計1,456頁よりなる「おもしろプロジェクト10年史」を刊行しました。

おもしろプロジェクト´07報告会と講演会

毎年２月にその年度のおもしろプロジェクトの成果報告会を開催しています。今年は２月20日にSCS教室で開催し、丸本学長、塚原教育国際担当副学長も出席しました。10件のプロジェクトの代表者にそれぞれ10分間ずつプロジェクターを使った報告をしてもらいました。発表されたプロジェクトは別表のとおりです。今年は昨年までと違い、学外の有識者２人[注3)]を招き、講演と講評も併せて行いました。学生たちは自分たちの活動を外部の目でみてもらい、講評も聞けて大変有意義だったと思います。

平成19年度おもしろプロジェクト

代　表　者（所属・学年は平成20年２月現在）	プロジェクトの名称
赤木　麻衣子（理工学研究科・Ｍ２）	山口県の自然と文化・歴史に関する情報コンテンツの充実
平峯　朋子（教育学部・３年）	ぽけっとラジオ
田辺　友章（工学部・４年）	ロボコン代表への道
松野　雄太（教育学部・４年）	CAPチャレンジ2007
茨　　久和（理工学研究科・Ｍ２）	エコファイターズ～エコキャンパス・エコシティを目指して～
古川　良太（理学部・２年）	めだかの学校
松本ゆうこ（工学部・２年）	ソーラーカーレーシングプロジェクト
森宗　　健（医学系研究科・Ｍ１）	だれでも遊べるおもちゃの兵隊
幸田　千聖（理学部・２年）	ビバ☆洞窟
黒田　祐樹（教育学部・４年）	Felicaを用いた山口大学電子認証システムの構築

今年は関係者約60人程度の参加でしたが、来年はもっと多くの一般学生、教職員にも参加してほしいと思っています。来年もまた学外有識者の講演・講評を考えています。

第13回４大学間
教育・研究交流連絡協議会

平成11年３月に４大学（山口大学、島根大学、愛媛大学、高知大学）の間で教育・研究交流協定を締結し、主として学生による自主的・実践的研究プロジェクトの研究成果発表を通じて交流を図っています。当初は年に２回開催されていましたが、最近は年１回の開催になっています。

今年は３月６、７日の２日間にわたり山口大学大学会館で開催されました。各大学より学生担当の副学長等が出席する連絡協議会と、別表のような各大学の学生によるプロジェクトの成果発表が行われました。山口大学からの２件はいずれも平成19年度のおもしろプロジェクトです。

学生たちが正課外の自主的な活動を体験し、またそれを通じて他大学の学生たちと交流をもつことは大変有意義なことです。自分たちが実施したプロジェクトの成果を発表する学生たちの顔は一様に自信に満ちて輝いていました。第２学生食堂「きらら」で開催された懇親会では食べものや飲みものがなくなった後も、大学を超えた学生たちの交流の会話が弾んでいました。

成果発表の様子

平成19年度４大学間
「学生交流自主的・実践的研究プロジェクト」

発　表　者	プロジェクトの名称
崎須賀　章子 （愛媛大学農学部）	南予からの花便り
伊藤　清治 （島根大学生物資源科学部）	大学を中心とした地域社交界の創設
幸田　千聖 （山口大学理学部）	ビバ☆洞窟
高橋　洸貴 （高知大学人文学部）	内発的発展論と現場の実践をつなぐ動的プロセスの考察
岸本　瑛子 （愛媛大学農学部）	えひめAI－１を用いて生ゴミ堆肥リサイクル －内子町を事例として－
坪田　智行 （島根大学大学院教育学研究科）	発見！感動！島根ワンダーランド －地域に根ざした地学教育を通して－
平峯　朋子 （山口大学教育学部）	ぽけっとラジオ

注１）他の委員とは私のことです。
注２）当初のプロジェクト名は「春の小川～めだかの学校～」でした。宅地開発などで次第に失われていく春の小川を復活させ、子供たちが遊び、めだかが泳ぐ日本の原風景を地域住民と協力して取り戻そうという取組でした。どことなく牧歌的な雰囲気が漂うこの取組に私も共鳴するところがありました。その後、プロジェクト名は平成11年に「春の小川」となり、平成12年からは現在の「めだかの学校」となって、地域住民との連携を主とした活動を続けています。
注３）東北福祉大学ボランティアセンター講師の小抜隆氏と京都のNPO法人・ユースビジョンのスタッフの足立陽子氏のお二人です。講演題目は小抜氏が「できることをできるだけ～地域社会との協働によるボランティア活動の実践～」、足立氏が「参加から参画、そして変革へ～新たな社会を創る学生・若者を応援する仕事を通して～」でした。

▶学内連絡先
TEL：083-933-5057（センター長室）
083-933-5655（理学部研究室）
E-mail：komiya@yamaguchi-u.ac.jp

「在りて在るもの」とは

古荘　真敬
（准教授　人文学部　哲学・思想講座）

■デカルトの気迫

「すでに何年か前のことになるが、私はこう気がついた。子供のころから私は、いかに多くの偽なるものを真なるものと認めてきたことか。そして、その後その上に築き上げてきたものが、どれもこれもいかに疑わしいことか。それゆえ、もしも自分が学問においていつか確固として持続するものをうち立てようと思うなら、一生に一度はすべてを根底から覆し、最初の基礎から新たに始めなければならない、と」

これは、デカルトによる『省察』の「第一省察」冒頭の文章です。授業で紹介するたびに、この文章から立ち上る凄まじい気迫に圧倒されそうになります。「一生に一度はすべてを根底から覆し、最初の基礎から新たに始めなければならない！」

■在りて在るものを！

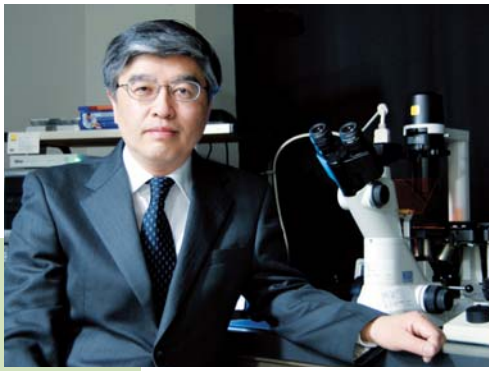
デカルトは、「確実で揺るぎない」知の基礎を見出そうとする志から、「一生に一度」の徹底的省察を断行しようとしています。「『私は在る、私は存在する』という命題は、私がそれを言い表すたびごとに、あるいは精神で把握するたびごとに必然的に真である」ということ。これが、彼の発見した最初の「確実で揺るぎない」ものでした。けれども、どうしてそんなにも、「確実で揺るぎない」知などにこだわる必要があるのでしょう。そもそも人間は、「これこそは本当に存在する」と確言できる何かを問い求めざるをえない宿命にあるからでしょうか。なるほど、「在りて在るもの（ontōs on「本当に在るもの」の意）」を情熱的に希求したギリシア哲学の精神、そしてまた、燃え上がる炎のなかから顕現した神が自らの名を「我は在りて在る者なり（ラテン語訳でego sum qui sum.）」と告げたとされる信仰の原風景、そういったものが遙か古代から、少なくとも西洋的な人間精神のうちには継承されてきたようです。

■在りて無きもののはかなさ

しかし私は、この「在りて在るもの」の希求という西洋哲学の根源をなす発想に、批判的考察のメスを入れたいと思っています。「在りて在るもの」と、ことさらに「存在」の概念を反復して強調する精神のこわばりの訳を解きほぐしてみたいのです。「世の中は夢かうつつか、うつつとも夢とも知らず、ありてなければ」という和歌がありますが、「在りて在るもの」を求める精神もまた、「無きもの」へと不断に移ろう「在るもの」の「はかなさ」の直観を本来の故郷としているに違いありません。だがおそらく、「花が咲いている！」という「私」の発語が、「本当だ。咲いてるね」という「あなた」の応答を、虚空のなかにさえ求めてしまうように、「はかなさ」を忌避する西洋的な「私」は、「在るもの」のリアリティを反復再認してくれる超越的な「あなた」を恋い求めるあまり、「在りて在るものを！」と自ら性急に畳語する理念的な空間のなかに巻き込まれてしまうのではないでしょうか。私は、そこからの出口を模索しています。それが、私の哲学および倫理学研究の課題です。

▶学内連絡先
TEL：083-933-5274
E-mail：furusho@yamaguchi-u.ac.jp

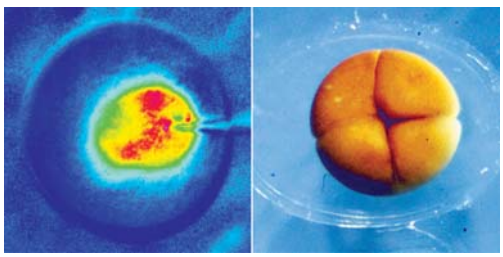
受精と発生
―ライブセルイメージングを用いた研究―



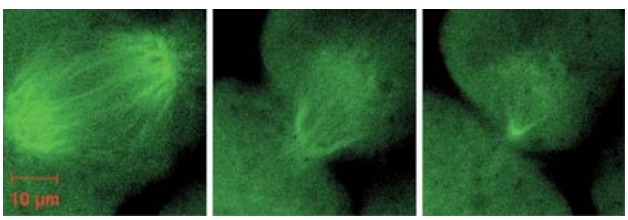
岩尾　康宏
（教授　大学院医学系研究科　応用分子生命科学系学域）

私たちの体は約60兆個の細胞からできています。これらすべては精子と卵が融合した１個の受精卵が細胞分裂してできます。受精によって父親と母親の遺伝子を混合して新たな生命を生み出すとともに、精子は眠っているかのような卵を目覚めさて発生を始める重要な役目があります。カエル卵では30分ごとに分裂して数千個まで細胞を増やしてから「体つくり」が始まります。両生類（カエル、イモリ）の卵は大きくて母体の外で発生するので、受精と発生のモデルとして研究が容易です。私の研究室では、これらの受精・発生に重要な分子のしくみを明らかにするため、生きた細胞内での分子の働きを知ることのできるライブセルイメージング技術（蛍光標識した分子の顕微鏡観察）を用いて研究を進めています。

精子による発生開始のしくみは、卵内で「砂時計」が時を刻み始めることに例えられます。では、どのようにして砂時計はひっくり返されるのでしょうか？卵を目覚めさせる最も重要な引き金（シグナル）は卵内のカルシウムイオン濃度の増加です。これはほぼすべての動物の受精に共通なシグナルです。カルシウムイオンと結合すると蛍光を発する色素を用いて受精時の濃度変化を測定することができます。私たちはイモリ精子中のクエン酸合成酵素というタンパク質が受精時に卵内に入ることでカルシウムイオン濃度を上昇させることを初めて発見しました。この酵素は普段はミトコンドリの中で働いていますが、受精のときは発生の引き金となる興味深いものです。発生開始の分子は哺乳類でも研究が進められていますが、両生類で初めて分かったクエン酸合成酵素が動物種にかかわらず普遍的な発生開始のシグナルとして働いているかを調べているところです。



イモリ卵での精子によるCaイオン濃度上昇
（左図、赤い部分）と受精後の細胞分裂（右図）



生きたカエル細胞での分裂時の微小管
（緑色蛍光タンパク質が融合したチューブリン）

両生類は脊椎動物の体つくりのモデルとして広く用いられてきましたが、不透明なため生きた細胞内で分子の働きを観察するには不適当でした。そこで、私たちはカエル卵から色素や卵黄を取り除き、透明な割球（細胞）を作り出すことに成功しました。これにより細胞分裂の調節に必要なチューブリン分子などを蛍光タンパク質で標識して、それらの働きを透明な細胞中で生きたまま調べることが可能となりました。さらに、カエルの受精卵での細胞分裂がゆっくりとなって体つくりが始まるときには、ガン抑制遺伝子として知られるPTENタンパク質が核の中へ移動して働くことがわかってきました。この透明化な割球では分裂が盛んなので、細胞分裂と発生の調節に必要ないろいろな分子を調べる絶好のモデル系となっています。

このように、私たちは両生類という実験の容易な研究材料の特性を生かし、哺乳類などでは研究が難しい分子機構の発見と解明に努力してきました。今後も、受精や発生に必須な分子の構造と細胞機能を解明することを通じて「種を越えた普遍的で基本的な分子メカニズム」を明らかにすることを目指した研究を行っていきます。

▶学内連絡先
TEL：083-933-5713
E-mail：iwao@yamaguchi-u.ac.jp

教員から寄せられた著書

The Changing Structure of the Automotive Industry and the Post-Lean Paradigm in Europe: Comparisons with Asian Business Practices.

（古川澄明、ゲルト・シュミット［Gert Schmidt］編著、九州大学出版会、2008年５月発行　vi+275頁）

本書『ヨーロッパ自動車産業の構造変化とポスト・リーンパラダイム』は、近年の欧州自動車産業を題材にして、内外研究者が連携する形で、ポスト・リーン生産パラダイムに関して、英語で世界発信をする試みです。同書は欧州自動車産業とくにドイツ自動車産業の構造変化、同産業の国際的ポジション、その東欧経済圏への近接的一体関係、日本メーカーとの戦略的提携や中国での事業展開などを取り上げた内容で構成されており、今日の世界の自動車産業研究でも注目を浴びている研究領域です。

そもそも西欧自動車産業は、低い生産性、低いフレキシビリティ、長いリードタイム、高い設計品質、高いブランド力を特徴とし、製品差異化とフォード式大量生産を主たる競争戦略としていました。しかし1990年代、ソ連崩壊に伴う東欧経済の市場経済化により、西欧メーカーは陸続きの隣接東欧地域に成長市場の機会を求めましたが、同時に同地域は低賃金生産拠点ともなって逆に脅威になるという、二重の競争環境の変化を経験しました。西欧自動車メーカーはその生産拠点を低賃金地域に求めて中東欧にシフトしました。そうしたなかでドイツ自動車生産拠点などは空洞化するのではないか、との議論が熱を帯びましたが、実際には欧州自動車メーカーは、一方においてプラットフォーム統合化やモジュール化など規模の経済・範囲の経済をねらった対応策をとりながらも、基本的にはブランド強化による価格設定力維持に集中し、その結果、予想に反して、例えばドイツ自動車メーカーは西欧の既存生産拠点と東欧生産拠点をネットワーク化し、ブランド力の強いセダン系を中心に生産量を維持・向上させました。他方、東欧の自動車産業にも外資が続々と進出し、数多くの外資系生産拠点が形成されました。それらの多くは東欧国内市場への供給拠点のみならず、欧州市場全体への輸出拠点と位置づけられました。こうした20世紀以来の産業進化のダイナミックスは、外資を受け入れて成長してきた中国経済の台頭による新時代の到来に対応を迫られている日本産業にとっても多くの示唆に富みます。

本書は、西欧メーカーの生産方式の適応的変化と、中東欧自動車産業の発展という両面から上記課題にアプローチしており、内外研究協力の成果を世界に発信するタイムリーな研究書です。（藤本隆宏・東京大学経済学部教授、東京大学ものづくり経営研究センター長の「推薦文」より）

古川　澄明　教授　経済学部　経営学科　TEL：083-933-5523

山口大学図書館教員推薦図書ポータルには、教員から寄せられた著書、学生に読んでほしい図書を紹介しています。
http://www.lib.yamaguchi.ac.jp/chosaku/

『絶対わかる物理の基礎知識　CONCEPT80』

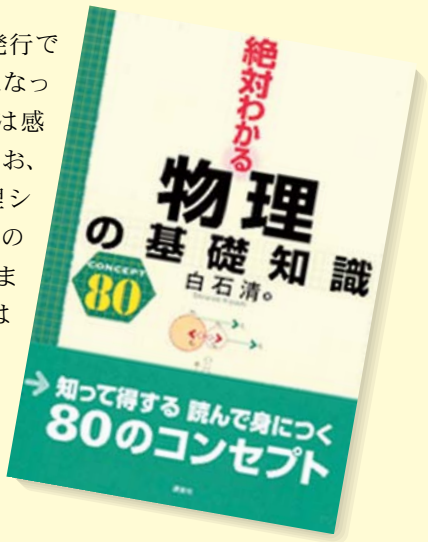
（講談社サイエンティフィク　2007年４月１日発行）

以前発行された、『絶対わかる力学』、『絶対わかる熱力学』、『絶対わかる電磁気学』、『絶対わかる量子力学』、『絶対わかる物理数学』の姉妹編（絶対わかる物理シリーズ）です。

理工学系１・２年生で学習する「物理学」の必須な部分を網羅し、概念重視で丁寧に解説しました。見開きで一項目という構成は、以前の５冊と同様ですので、必要に応じて好きなところから読むことができます。予習、復習に活用していただきたいと思います。ただ、すべてを一冊に盛り込んだので、詳しい説明、結果の導出などは、個々の分野の本を当たっていただくことになります。その際は是非「絶対わかる物理シリーズ」を参考にしてください。必ずや理解できるでしょう（著者が一人であることの強みです）。そういうこともありますので、どちらかといえば、予習より復習の際に「使える」本です。ですから、大学院博士前期課程（修士課程）受験勉強のときの「最後の一冊」としていただければ幸いです。実際、最低限、この本に書いてあることを知らないようでは、特に理学部の場合は大学（学部）を出たとは言えないように思います。

最近の学生は本をあまり読まないようですね。最近の流行のように色つき、ではなく白黒ですが、文字は大きく読みやすくしてもらいました。先にも述べましたとおり、見開き単位ですっきりした構成で、とても見やすいと自負しています。価格もそこそこです。理系学生のみなさんに活用していただくことを希望します。

実は１年前の発行です。すでにご覧になって下さった方には感謝いたします。なお、「絶対わかる物理シリーズ」は、他の著者分はまだ出ますが、私の執筆は当分お休み。



白石　清　教授　大学院理工学研究科　自然科学基盤系学域
TEL：083-933-5681　E-mail：shiraish@yamaguchi-u.ac.jp

園芸作物保蔵論 －収穫後生理と品質保全－

（茶珎 和雄(代表)・泉　秀実・今堀 義洋・上田 悦範・寺井 弘文・中村 怜之輔・山内 直樹　編著、建帛社　2007年３月）

園芸学の分野には果実、野菜および花きの生産に係わる分野と、これらの園芸作物が収穫された後、消費者の手に届くまでの品質保持を扱う分野があります。後者の分野は、園芸利用学または園芸作物保蔵学と呼ばれています。本書は、園芸生産物の流通・貯蔵における品質保持技術とその過程で生じる生理・生化学的変化について解説するとともに、園芸作物の栄養成分および機能性成分の特徴について説明しています。また、園芸作物の取り扱いと環境への影響や食生活への係わりについても述べています。

本書の内容は、①園芸作物の成分特性、②園芸作物の収穫後生理、③園芸作物の流通・貯蔵、④園芸作物の検疫・市場病害、⑤園芸作物の形質転換と品質、⑥園芸作物の廃棄物処理と利用などとなっています。このような園芸利用学分野の専門書として、青果保蔵汎論（緒方邦安編、建帛社）が出版されたのが1977年２月です。その後、約30年の歳月が流れ、ここに内容を一新し、今回出版できたことは意義深いものと思っています。農学系、食品・栄養学系、食品加工学系の学部学生・大学院生、ならびにこの分野の研究・教育に携わっている方々にご一読いただければ幸いです。

山内　直樹　教授　農学部　生物資源環境科学科
TEL：083-933-5843　E-mail：yamauchi@yamaguchi-u.ac.jp

新聞掲載された山大・地域から見た山大

平成20年２月～平成20年３月

２月

◆ アミロイド研究を解説
－山大医学部　石原教授が最終講義
（宇部日報：１日）

◆ 工学部NOW　研究アラカルト　－山口大－
②大学院理工学研究科教授　田口常正
省エネルギー型白色LED照明
システムの開発と古美術照明への応用
（宇部日報：１日）

◆ 学生演劇サークル３団体の公演
３月１、２日　山大大学会館
（宇部日報：２日、毎日：28日、サンデー山口：29日）

◆ 山大大学院科長　医は西田氏、理工は三浦氏
（山口、宇部日報：２日）

◆ 古代の謎に注目
－29日まで　山大の資料館で企画展－
県内で発掘途中の遺跡など　（読売：８日）

◆ ひと　時間かけての診療は理想的
－山口大医学部付属病院女性診療外来主任
松田昌子さん－　（宇部日報：６日）

◆ 山口大平均は4.1倍
２次試験願書受け付け　医学科後期23.5倍に
（宇部日報：７日）

◆ 工学部NOW　研究アラカルト　－山口大－
③知能情報工学科研究特任教授　宮本文穂
公共インフラに知能を持たせて
自己健康診断・長寿命化　（宇部日報：８日）

◆「山大ビジョン」発表　－運営方向性示す－
学士課程充実へ　学部・院再編など
（山口：14日、中國：22日）

◆ 医師不足対策で県寄付講座
山大、新年度から
２年計画、5,000万円計上へ
（山口：14日、朝日・毎日・中國：21日、宇部日報：３月８日）

◆ 山大卒業制作展　（サンデー山口：15日、山口：22日）

◆ 工学部NOW　研究アラカルト　－山口大－
④循環環境工学科教授　今井　剛
泡を利用した省エネルギー
水の浄化でも温暖化対策　（宇部日報：15日）

◆ 月曜インタビュー
山口大大学院理工学研究科教授　山本哲朗さん
防災教育、子供のころから　（山口：18日）

◆ 湯田温泉活性化へ　山大経済学部が研究発表
－観光政策関連組織会議－
効能は高評価　情緒に課題も
魅力数値化し分析
（山口・読売・毎日・朝日：20日）

◆ 新学部長に山内氏　－山口大農学部－
（中國：21日、山口・宇部日報：22日）

◆「洞窟清掃」など10団体活動報告
－山大おもしろプロジェクト－　（山口：21日）

◆ 研究、教育貢献で感謝状
山口大　秋吉台科学博物館に
（山口：21日、西日本：３月20日）

◆ 工学部NOW　研究アラカルト　－山口大－
⑤理工学研究科教授　堀　憲次
コンピューターで「薬」を作る
in silico合成経路開発　（宇部日報：22日）

◆ 25日から２次前期
県内の国公立大３校入試
（中國：23日、山口・朝日・毎日・読売・中國：26日）

◆ 山大感性デザイン工学科卒展
１日からギャラリーCAN　（宇部日報：23、29日）

◆ 社会への貢献を実感
常盤公園の測量図　山大生が市に寄贈
（宇部日報：27日）

◆ 山大特許出願件数全国10位196件
－工学部が最多－　（山口・日経：28日）

◆ ネットで遠隔授業　－下関市－
吉母小と蓋井小　山大実施、あり方探る
（山口・朝日：28日）

◆ 山口で消費者力向上セミナー
－団体会員230人参加－
人文学部横田尚俊教授「消費者パアーによる地域づくりをめざして」基調講演　（山口：28日）

◆ ケニア訪問の体験報告　－山口市－
山大生「恩返しにまた行きたい」　（読売：28日）

◆ 工学部NOW　研究アラカルト　－山口大－
⑥理工学研究科・教授（応用化学科）森田昌行
高性能電池の開発を支えるナノケミストリー
（宇部日報：29日）

◆ 山大大学院生命科学産学公連携セミナー
あす、全日空ホテル　（宇部日報：29日）

3月

◆ “ため池博士” ありがとう
退官講義教え子企画
灌漑研究、指導者　８日に山大・西山壯一教授
（読売：１日）

◆ 挑戦の気持ち大切に
山大建設工学科卒業祝賀会
成績優秀者表彰も　（宇部日報：１日）

◆ 山口大学　公開講座　受講生を募集します
（読売：１日）

◆ 山大留学生に自転車
山口ライオンズクラブが10台贈る
（読売・中國：５日、サンデー山口：９日）

◆ 元山大教授加藤宏文さん講師　－宇部市－
４月から文化会館「源氏物語を読む会」開講
５年間で全54帖を読破　（宇部日報：５日）

◆ あす10回目の定演
山口大吹奏楽部OBとの特別演奏も
（中國・サンデー山口：７日）

◆ 山大前期1,534人合格
（宇部日報：７日、読売・毎日・朝日・山口・中國：８日）

◆ 山大が小学校教育コース
2009年度から現場演習など中心
（中國・毎日・読売・山口：８日、朝日：12日）

◆ はしか入学期へ「予防」
中国地方各大学　接種義務化や対策室
（中國：８日）

◆ 工学部NOW　研究アラカルト　－山口大－
⑦理工学研究科・教授（機械工学科）西村龍夫
構造を持つ流体　非線形⇄制御
（宇部日報：７日）

◆ バングラデシュの潜在体験など報告
－市民団体企画山口で交流会－　（山口：11日）

◆あすから後期日程
国公立大二次試験
（中國：11日、山口・読売・中國・毎日：13日）

◆ 新型白色LEDで電子内視鏡を開発
山大など研究チーム
自然光に近く、小型・省電力化
09年度以降の事業化目指す　－光量課題－
（山口・毎日・読売・宇部日報：12日、日経：17日）

◆ LEDがコケ撃退　－秋芳洞－
蛍光灯照明交換で激減　（毎日：14日）

◆ あの人この人話題の人
老年研究頴原賞を受賞する山口大大学　助教
季桃生さん
結果出し還元したい
（宇部日報：14日、読売：17日）

◆ 山大大学院理工学研究科「ペンタックス賞」
人工筋肉応用つながる研究　山吹さんと
空き家活用へ改修など研究　山本さんに
（山口：18日）

◆ 「役立つ経験できた」
宇部高SSH 山大工学部での講義終了
ユニークなシステムを提案　（宇部日報：15日）

◆ 優秀な学生に常盤賞
山大工学部同窓会　学業や課外活動活躍たたえる　（宇部日報：18日）

◆ 工学部NOW　研究アラカルト　－山口大－
⑧理工学研究科・教授（知能情報工学科）
中村秀明
人工生命の工学的応用　鳥や魚の動きに学ぶ
（宇部日報：21日）

◆ 後期372人合格　－山口大－　（読売：22日）

◆ 山大、2480人が卒業
技術経営研究社会人18人も
（山口・読売・毎日：26日）

◆ がん専門医を養成　－山大医学部－
４月から大学院教育３コース新設
患者と向き合う臨床重視へ転換
（宇部日報：26日、山口：29日）

◆ 山大のPR担う総合企画部新設　－人事異動－
（朝日：28日）

◆ 宇部興産学術財団　研究援助、５人に決定
山大大学院・比嘉教授ら　（山口：29日）

◆ きぼう実験に山大三上真人准教授案
（読売：31日）

◆ 日野原さんが健康法を紹介
－山大経済学部の教育講演会－　（読売：31日）

ニューリリース＆メディア掲載紹介として、下記アドレスのページにも掲載しております。
http://www.yamaguchi-u.ac.jp/inform/

Information

平成20年度公開講座について

講　座　名　・　講　師　名	受講対象者	開講期間	時間帯
「おくのほそ道」を読む 講師：藤原マリ子（教育学部教授）	市民一般	5/17、31、6/14、28、7/12	14:00～15:30
小麦栽培から始めるパンづくり 講師：高橋　肇（農学部教授）、井上敬之（同技術職員） 高田兼則（近畿中国四国農業研究センター）、徳永　豊（スリーヒルズアソシエイツ・代表） 中司祐典（山口県農林総合技術センター）	市民一般 （成人対象）	6/4、8/20、11/5	10:00～15:00
女性のいきいき健やかライフのための健康講座 講師：松田昌子・田中満由美（大学院医学系研究科教授）、岡野こずえ（同准教授） 山元　公美子（同助手）、中尾富士子（九州大学大学院医学研究院講師）	概ね40歳以上の一般女性	6/7、21	13:00～16:00
「世界の教育と学校」を探索する －「世界の学校文化」、「世界の学校の３類型」、 「英国の教育と日本の教育改革の関係」、「世界１位のフィンランドの教育」－ 講師：小川　勤（大学教育センター教授）	市民一般	6/21、7/5、12、19、26、8/2	13:00～15:00
プロの技術で挑む小麦栽培から始める地産地消のパンづくり 講師：吉見匡司（嘉川興業株式会社） 末成秀一朗（創作ベーカリー秀「Shu」店長） 高橋　肇（農学部教授）	平成16～19年度の公開講座「小麦栽培から始めるパンづくり」の受講修了者	6/25	10:00～15:00
電波で見た宇宙の姿 講師：藤澤健太（大学院理工学研究科准教授）	市民一般	6/7～7/5 （毎週土曜計５回）	14:00～16:00
木工入門 講師：岡村吉永（教育学部教授）	市民一般 （小学生以上） ※小学生は保護者同伴	①8/8～8/10 ②8/29～8/31	8:30～13:00
今日から始めるグリーンライフ講座 講師：田中秀平・高橋　肇（農学部教授）、藤間　充・竹松葉子（同准教授） 嘉村則男（同技術専門職員）、高田　暁（同技術職員）	市民一般	8/29、10/3、11/28、H21.2/6	10:00～15:00
香りを科学する 講師：梶原忠彦（山口大学名誉教授）、松井健二・青島　均（大学院医学系研究科教授） 赤壁善彦（農学部准教授）	市民一般	8/30～9/27 （毎週土曜計５回）	13:30～15:00
農山漁村での安らかな暮らしを願って、柿本人麻呂を祀る 講師：吉村　誠（教育学部教授）、坪郷英彦（人文学部教授） 高山宣道（八幡人丸神社・宮司）	市民一般 （成人対象）	9/27～9/28	13:00～16:00 10:00～13:00
難病と戦う 講師：田口敏彦（大学院医学系研究科教授）、根来　清（同准教授）、 檜垣真吾（医学部付属病院准教授）、川井元晴・湯尻俊昭（同講師） 中村浩士（同助教）	市民一般	9/22～11/10 （※10/13、11/3を除く） （毎週月曜計６回）	19:00～20:30
山口の火山のふしぎ 講師：大和田正明（大学院理工学研究科教授） 澤井長雄・阿部利弥・永尾隆志（同准教授）	市民一般	10/4	10:00～16:00
やまぐちサタデー・カレッジ2008（外国語学習コース：英語） レシピで学ぶ英語 講師：皆尾麻弥（人文学部講師）	市民一般・学生	5/10～6/28 （※5/31、6/21を除く） （毎週土曜計６回）	13:30～15:00
やまぐちサタデー・カレッジ2008（現代文化コース） 言語と文化 講師：平野尊識（人文学部教授）	市民一般・学生	10/4～10/25 （毎週土曜計４回）	15:10～16:40
やまぐちサタデー・カレッジ2008（異文化交流コース） 中国の古典文学 講師：阿部泰記（大学院東アジア研究科教授）	市民一般・学生	10/4～10/25 （毎週土曜計４回）	13:30～15:00
やまぐちサタデー・カレッジ2008（異文化交流コース） ヨーロッパ古寺巡礼－イタリア、ドイツ、オーストリア 講師：坂本貴志（人文学部准教授）	市民一般・学生	11/8～11/29 （毎週土曜計４回）	15:10～16:40

お問い合わせ
お申し込み

山口大学エクステンションセンター
〒753-8511 山口市吉田1677-1
TEL：083-933-5059　FAX:083-933-5029
E-mail:kyoutu@yamaguchi-u.ac.jp
http://www.ext.yamaguchi-u.ac.jp
・電話受付の場合：月曜～金曜　8:30～17:00（土・日・祝祭日は除く）

お　知　ら　せ

第37回七夕祭

今年も７月５日（土）に山口大学吉田キャンパスで（第37回七夕祭）を開催します。七夕祭とは、山口大学の寮生が運営する寮祭のことです。例年大盛況で、みこし、ステージ企画、提灯点灯などのイベントがたくさんあります！また、学生を中心にさまざまな模擬店が出店され、祭りをとてもにぎやかなものにしてくれます！山口市内一番を誇る大規模な祭りといっても過言ではありません。ぜひ７月５日は七夕祭に足を運んでみてください!!

●**開催日時**　平成20年７月５日（土）　15時～
●**開催場所**　山口大学吉田キャンパス（山口市吉田1677-1）
●**イベント**

15：00～17：00	ビンゴ大会（理学部前ステージ）
17：30～19：30	サークルの出し物（理学部前ステージ）
18：00～	みこし（吉田キャンパス内）
19：00～	提灯点灯（吉田キャンパス内）
20：00～21：00	実行委員１年生による企画ステージ（理学部前ステージ）

●**その他のお知らせ**
七夕祭Webページ
http://web.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~j010mc/37th_tanabata.html

オープンキャンパス

●**開催日時**　平成20年８月５日（火）人文・教育・経済・理・農学部
平成20年８月６日（水）医・工学部
●**開催場所**　８月５日（火）山口大学吉田キャンパス（山口市吉田1677-1）
８月６日（水）医学部：山口大学小串キャンパス（宇部市南小串1-1-1）
工学部：山口大学常盤キャンパス（宇部市常盤台2-16-1）
●**対 象 者**　高等学校生徒、保護者等
●**内　　容**　教育活動の紹介、各学部での説明、研究室訪問、施設見学、大学生活相談
●**申し込み**　事前予約が必要です
詳細は決定次第Webページ（http://www.yamaguchi-u.ac.jp/）でお知らせします
●**オープンキャンパスに関するお問い合わせ先**
学生支援部　083-933-5147

デジタル山口大学

山口大学の大学活動を紹介する番組として、山口ケーブルビジョン（株）12chで毎月１日から15日15：30～15：45に放映しています。サービスエリアは山口市、防府市、宇部市、美祢市です（平成20年５月現在、一部地域を除く）。
放送中の番組及び過去に放送した番組は、山口大学Webページでもご覧いただけます。
【URL】http://ds21.cc.yamaguchi-u/ac.jp/~www-yu/digiyama/index/
●**６月の番組予定**
６月１日（日）～15日（日）「医学部は今」
●**ご意見・ご感想をお寄せ下さい**
E-mail　sh011@yamaguchi-u.ac.jp

キャンパス風景

東亜経済研究所新館（2008.5月）

原稿をお寄せ下さい

広報誌は、学内だけでなく、山口県内外の高校以上の教育機関、地方自治体および主として、中国・四国地区の企業等学外の約700の機関に配布しています。

ア.「トピックス」「国際交流」「山口大学の将来についての提言」など

大学の新規の出来事・特徴的な取組、学生・職員の活躍などのニュースをお知らせください。また、昨今、大学の将来についての関心が大変高くなっています。そこで、山口大学の将来のあるべき姿について、学内外から原稿をいただければ幸いです。建設的なご意見を期待します。

イ.「私の授業」「私の研究」

「私の授業」「私の研究」では、日頃なさっている授業や研究を、高校生にも分かりやすいように、述べていただければと存じます。

ウ.「教員から寄せられた著書」

大学教員の著書を紹介していますので、本を執筆されましたらお知らせください。

エ. 催し物

公開講座、学会、研究会等の開催計画がありましたら、日時、場所、名称、責任者氏名、所属、電話番号などをお知らせください。

※写真について

著作権・肖像権等に注意してください。画像は電子データの場合解像度350dp以上、縦横1,000pixel以上、写真はデジタルカメラで撮影した場合は150万画素以上でお願いします。また、本文中に画像を貼り付ける場合は元画像データも一緒に送付してください。

原稿には締切期限を設けませんので、適宜、下記までE-mailまたはフロッピー等に入れてお送りください（トピックス・催し物については、発行月の１カ月前までにお寄せください）。その他、種々の問い合わせも下記までお寄せください。

広報誌YU Informationは５月、７月、11月、３月の年４回の発行です。

【お問い合せ先】
〒753-8511
山口市吉田1677-1
国立大学法人山口大学総合企画部
広報チーム
☎083-933-5007　FAX083-933-5013
E-mail：sh011@yamaguchi-u.ac.jp

個人情報の取り扱いについて

個人情報管理におきましては、「個人情報保護法」を遵守し、御投稿いただいた方の個人情報を安全に取り扱い、十分な配慮と適切な処置を講じて対応いたします。

編集後記

新年度を迎えて、新入生がキャンパスに集い、大学らしい活気の溢れる季節になりました。

本号は特集として「明日の山口大学ビジョン」を掲載いたしました。本年２月に策定された「ビジョン」の全文を掲載し、教職員をはじめとして、広く地域社会の皆様にお知らせし、山口大学の近未来をイメージしていただきたいと考えています。

また、学生の皆さんにもビジョンを読んでいただき、山口大学全体を理解し愛着を持って、勉学、研究、課外活動等に励んでいただきたいと考えています。

これからの大学は、学生、教職員、地域社会の方々が相互に協力・連携をとりながら、社会に根ざした教育・研究の機関として発展していくことが必要と思います。そのためにこの「ビジョン」が広く理解され、実現されることを期待し、特集記事を組みました。

この広報誌について、皆様方の忌憚のないご意見をお待ちしております。

（福田　隆眞）

◎山口大学Webページhttp://www.yamaguchi-u.ac.jp/

山口大学広報誌第八十七号

平成二十年五月三十日発行

編集発行　山口大学広報委員会

（総合企画部広報チーム）

住　所：山口市吉田一六七七－一

電　話：（〇八三）九三三－五〇〇七

ＦＡＸ：（〇八三）九三三－五〇一三

E-mail　sh011@yamaguchi-u.ac.jp

（本紙に関するご意見・ご感想をお寄せください）

印　刷：㈱マルニ

広報委員会委員

村田　秀一（総務企画担当副学長）
福田　隆眞（教育学部　総務企画担当副学長補佐）
坪郷　英彦（人文学部）
菊屋　吉生（教育学部）
成富　敬（経済学部）
宮田雄一郎（理学部）
坂井田　功（医学部）
浜本　義彦（工学部）
藤間　充（農学部）
何　暁毅（大学教育機構）
近久　博志（産学公連携・イノベーション推進機構）
三池　秀敏（大学情報機構）
長畑　実（エクステンションセンター）
富永　倫彦（アドミッションセンター）
中尾　淑乃（総合企画部広報チーム）

※ 次号は７月31日発行予定です。（５月・７月・11月・３月の年４回発行予定）